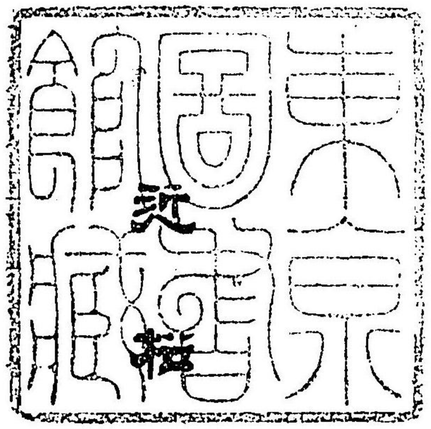
70-118



門

左

衛

門

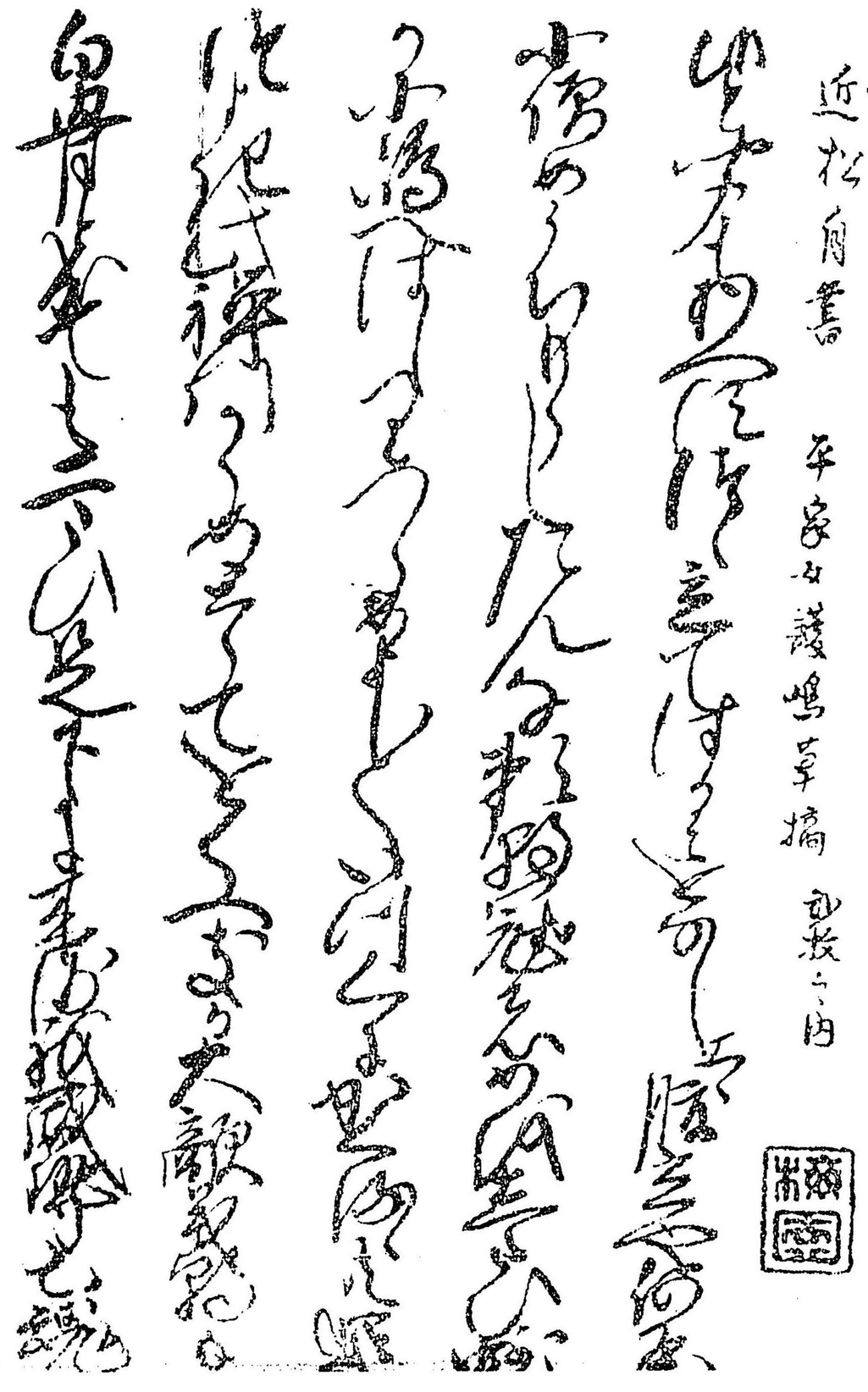
巣林子

のこれとは思ふものからうみ水の

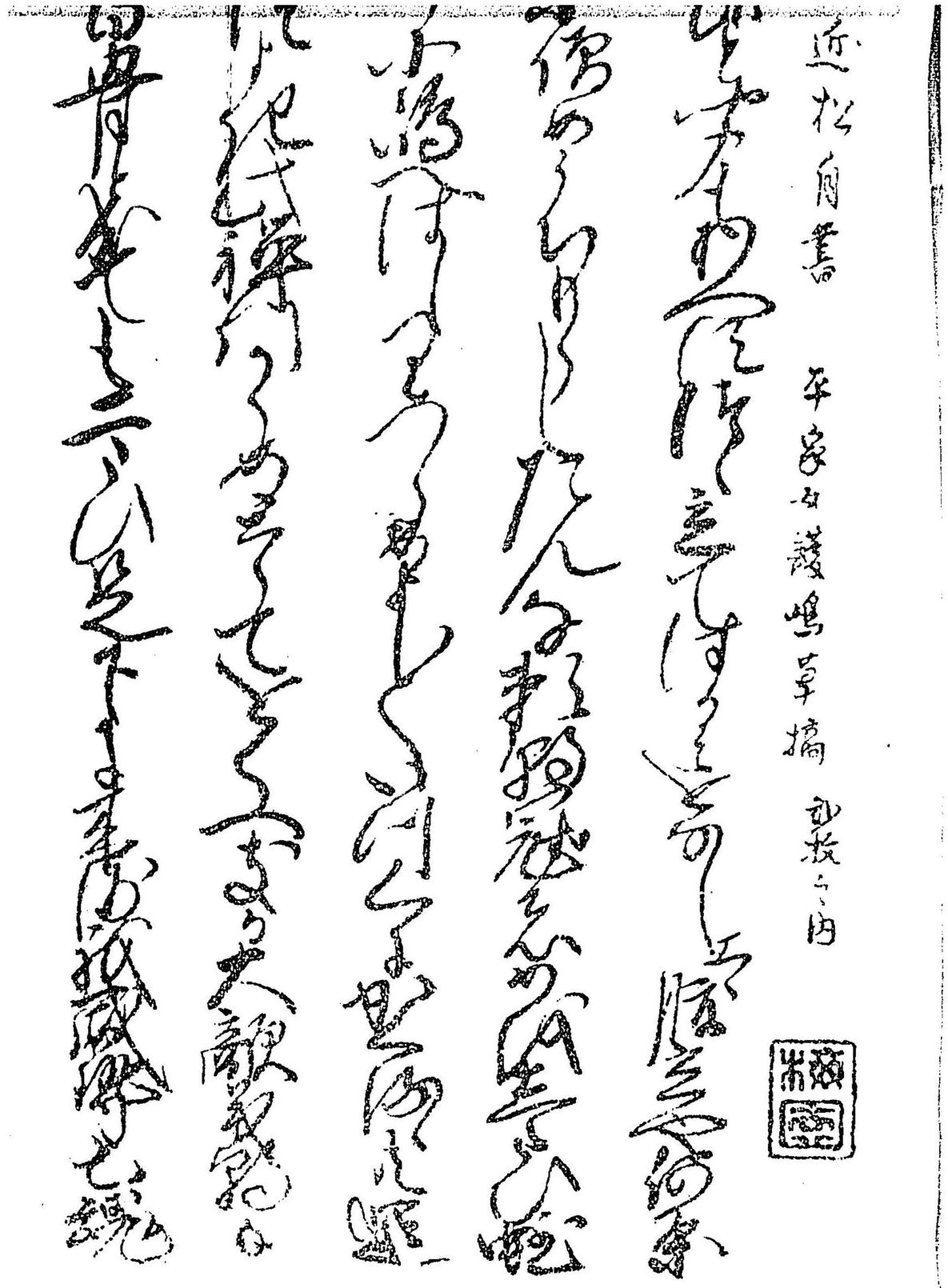
けはしきあだなるくち木かきして

近松門左衛門

近松用書　平家女護嶋草摘　[illegible]



近松自書　年号は慶安か寛文か



目録

年譜……一——六
序言　近松門左衛門……一——五
現實界に於ける彼　第一……六——一五五
其一　元祿の日本……六——二〇
其二　彼の生涯《上》……二一——三三
其三　彼の生涯《下》……三四——五四
其四　彼の詩人的生涯……五五——八三
其五　彼の著作……八四——九六
○其六　彼の文章《上》……九七——一二六
其七　彼の文章《下》……一二七——一四五
其八　彼何人ぞ……一四六——一五五

理想界に於ける彼　第二……一五六——二三八
其一　彼の人生に對する觀念……一五七——一七七
其二　彼の男性に對する見解……一七八——一九一
其三、彼の女性に對する見解……一九二——二〇六
其四、彼の社會に對する見解……二〇七——二一六
其五、彼の宗教道德に對する見解……二一七——二三〇
○結論　彼は多くの類似に於て日本の沙翁なり……二三一——二三八
附錄……一——四〇
近松門左衛門著作表……一——九
近松門左衛門著作一斑……一〇——二八
日本戲曲史……二九——四〇

年譜

◎承應二年癸巳(一歲)生る。母本其角生る。江戸第四世綱有將軍家綱の三年、京都後光明帝の十年。

◎明暦元年乙未(三歲)後四院帝即位。

◎明暦三年丁酉(五歲)江戸大火。林道春七十五にして沒す。

◎萬治元年戊戌(六歲)室鳩巢生る。明の鄭成功援兵を乞ふ。

◎萬治三年庚子(八歲)水戸義公光圀修史館を開く。

◎寛文三年癸卯(十一歲)此の前後肥前の唐津近松寺に遊學す。霊元天皇即位。

◎寛文五年乙巳(十三歲)新井白石生る。此頃より井上播磨掾の淨瑠璃大坂に行はる。

◎寛文六年丙午(十四歲)荻生徂徠生る。安藤白奚生る。

◎寛文七年丁未(十五歳)　江島其磧生る。

◎寛文十年庚戌(十八歳)　林信篤の「本朝通鑑」成る。

◎延寶元年癸丑(廿一歳)　此頃京都に來り一條家に仕ふ。江戸に於て第一世市川團十郎十四歳にて演劇に荒事を始む。

◎延寶三年乙卯(廿三歳)　狩野探幽沒す七十三。

◎延寶五年丁巳(廿五歳)　此頃都萬太夫の爲に始めて演劇脚本を作り、後宇治加賀掾の淨瑠璃京都に行はれ爲に戯曲を作る。而して浪人して弟岡本一抱子の家に寓せり。

◎延寶八年庚申(二十八歳)　水戸義公扶桑拾葉集を京都に獻ず。殿有將軍沒す、年四十。

◎天和元年辛酉(二十九歳)　江戸第五世將軍吉就職。

◎天和二年壬戌(三十歳)此頃「世襲曾我」を作る。　山崎闇齋六十五にて沒す。四山宗因沒す七十八。

◎貞享三年丙寅(卅四歳)　大坂竹本筑後掾の爲に「出世景清」を作りて送る。

◎貞享四年丁卯(卅五歳)　東山帝即位。

◎元祿三年庚午(卅八歳)　正月京都より移て大坂に住む。將軍孔子の廟を湯島に遷す。

◎元祿四年辛未(卅九歳)　竹田出雲生る。　熊澤蕃山沒す年七十三。

◎元祿六年癸酉(四十一歳)　井原西鶴五十二にて沒す。

◎元祿七年甲戌(四十二歳)　松尾芭蕉沒す年五十一。

◎元祿八年乙亥(四十三歳)　元字金銀を鑄る。

◎元祿十年丁丑(四十五歳)　加茂眞淵生る。

◎元祿十一年戊寅(四十六歳)　木下順庵沒す七十八。

◎元祿十三年庚辰(四十八歳)　始めて社會的戯曲「長町女腹切」「淀鯉出世滝登」

を作る。　水戸義公七十三にして沒す。

◎元祿十四年辛巳(四十九歳)　新井白石の「藩翰譜」成る。　尙契沖沒す。　赤穗の遺士四十七人其主の讐を報す。

◎元祿十五年壬午(五十歳)　横井也有生る。

◎元祿十六年癸未(五十一歳)「曾根崎心中」を作る。

◎寶永元年甲申(五十二歳)「心中重井筒」を作る。　河村瑞賢新大和川を疎す。

寶字銀を鑄る。

◎寶永二年乙酉(五十三歳)「雪女五枚羽子板」を作る。　伊藤仁齋七十九にて沒す。　北村季吟八十八にて沒す。

◎寶永三年丙戌(五十四歳)　當十錢を鑄る。

◎寶永四年丁亥(五十五歳)「丹波與作」を作る。　其角沒す。

◎寶永六年巳丑(五十六歳)「歌念佛」を作る。　常憲將軍沒す年六十四。　江戸第六世文昭將軍家宣就職。

◎寶永七年庚寅(五十七歳)　中御門帝即位。

◎正德元年辛卯(五十八歳)「冥途飛脚」を作る。　水戸「禮儀類典」を京都に獻ず。　稻生若水沒す六十一。

◎正德二年壬辰(六十歳)　新井白石の「讀史餘論」成る。　文昭將軍沒す五十一。

◎正德三年癸巳(六十一歳)　江戸第七世有章將軍家繼就職。

◎正德四年甲午(六十二歳)　竹本筑後掾六十四にて沒す。　貝原益軒沒す八十五。　江戸大奥の老女江島流さる。

◎正德五年乙未(六十二歳)「國姓爺合戰」を作る。　水戸「大日本史」脫稿。

◎享保元年丙申(六十四歳)　有章將軍沒す。　江戸第八世有德將軍吉宗就職。

◎享保三年戊戌(六十六歳)「曾我會稽山」「博多小女郎浪枕」を作る。

◎享保五年庚子(六十八歳)「心中天網島」を作る。

◎享保六年辛丑(六十九歳)「女殺油地獄」を作る。

◎享保九年甲辰(七十二歳)「關八州繋馬」を作る。十一月四日最後の作たる「右大將鎌倉實記」場に上せらる。十一月二十二日沒す年七十二。前田俟綱紀八十二にして沒す。

近松門左衛門

塚越芳太郎著

序言

近松門左衛門

法妙寺。元祿の人生詩人。落日風吹皷子花。新日本。勇悍なる國民。日本膨脹史の第一頁は已に筆を著けられたり。將に出でんとする詩人。我邦に於ける唯一の人生詩人なり。吾人は此の詩人を觀察せん。

廣濟寺

太坂に遊ぶる旅客は去つて久々智村廣濟寺の妙見に至ることあるべし。廣濟寺の妙見に至るものは寺側の古墳累々たる南に高さ一尺二三寸許の自然石が其著黑なる而に無數の風跡雨痕を住めて星霜の深きを紀念しつゝあることを發見すべし。而して石には則ち阿耨院穆

法妙寺

元祿の人生詩人

矣日一具足居士及ひ一株院妙中日事信女の字の刻せられ、背後に享保九年甲辰十一月二十二日の字の誌されたるあることを認むべし。

又去て西高津村法妙寺に至るものは、其形を同ふし其大さを同ふし更に其文字を同ふしたる一墓碑が此處にも安置せられつゝあることを認むべし。此の苔斑なる石片は實に元祿の人生詩人近松門左衛門が其妻と共に世をしのびたる彼の實在を纔に地誌の上に證明すべく止めたる彼が唯一の名跡にあらずや。

世の記憶は云ふ。『法妙寺の墓は彼が生前に於て自ら樹てたるものに係り、彼が靜に其觀世の眼を閉ちつゝ永久休止の牀に横はれるは廣濟寺畔の草白く苔冷やかなる處なり』と。去れどもそれさへ今はたしかならざるなり。

天漠々たり、地漠々たり、彼が花の如き詩腸は竟に安くにか在る。

二

落日風吹鼓子花

日月去て痕なく、風雲消て影なし。世の詩人の昔を訪はんと欲するもの、誰か『重來兼恐無尋處、落日風吹鼓子花。』の感慨なきを得んや。

* * * * * * * * * * * *

新日本

春風秋雨二百歳、一たび世界の波に洗はれたる日本は今や新なる光景に充ちたり。新なる光景に充ちたる日本は更に添へられて大なる光景に充たんとす。

勇悍なる國民

三檣船に駕して大東洋上に其跳梁を恣にしたりし勇敢なる國民の見孫は、已に三百年の休憩より起ちたるにあらずや。三百年の休憩より起ちたる彼等は、已に皇勉卅年にして其内地を充實したるにあらずや。而して其内地の充實を報告すべく彼等が間に自主的の警語は

日本膨脹史の第一頁は已に筆を着けられたり

將に出んと欲する詩人

已に叫ばれたるにあらずや。朝鮮海より掃したる新聞は已に南陽灣日の勝報を傳へ大孤山沖の大勝報を傳へたるにあらずや。韓山より送りたる報知は已に成歡驛外の戰勝を告げ平壤城外の大戰勝を告げたるにあらずや。隣邦の獨立を扶植すべく大支那國に向ての義俠なる戰は已に宣せられて方に戰はれつゝあるにあらずや。日本膨脹史の第一頁は已に筆を着けられたるにあらずや。

大なる日本は應に來るべし。大國民大得意の時代は應に近づくべし。從て此の得意に充ちたる大國民を歌ふものゝ出て來るべき日も恐らくは甚た遠きにあらざらん。

吾人は此の新日本の詩人を覓めて之を待つの久しきに堪へず、顧みて舊日本の詩人を覓めて切に近松門左衛門を憶ひ出でずんはあらさりき。顧ふに彼れ門左衛門も亦以て傳ふへき乎。

我邦に於ける唯一の人生詩人なり

晉人は此の舊日本の詩人を觀察せん

參照

蓋し彼は過去の我邦に於ける唯一の人生詩人なりしなり。其歌ふ所は未だ以て新日本の國民を悉すに足らずとするも、亦固より以て全たき人類を悉くすに足らずとするも、其舊日本の國民を歌ふや餘りありと謂ふべし。舊日本の國民にして傳ふべくんば、彼豈傳ふべからざらんや。

將に出んとするの詩人は將に出んとするの人に由て傳へしめよ。吾人は今暫くこゝに此の舊日本の詩人を觀察せんとす。

〔註〕或は云ふ『法妙寺には近松氏累代の墓も在り。而して廣濟寺の墓は彼晩年ゆかりありて寺島(今松島)なる船大工尼崎屋吉左衛門の家に退隱し居たりしに、尼崎屋の子廣濟寺の僧となりて日照と云ふもの、爲に墓を設けしなり』と。又云ふ『後尼崎屋絶家し今は同所の山城屋宗右衛門(或は云ふ彼が妻の家)なるもの毎年一回廻向す』と。法妙寺廣濟寺共に日蓮宗なり。

現實界に於ける彼　第一

秋葉水に落つ

詩人の生涯も幾片の渦紋を織るを得べし

秋葉水に落ちて、晴波輕やかに渦紋を織る。此の秋葉や、此の渦紋や、微は即ち微なれとも、猶以て美の女神を宿すに足らずや。

天地の眼よりして之を見ん乎、秋葉啻ならざる詩人の生涯も、一たひ人世の水に點しては、以て幾片の渦紋を織るを得べし。渦紋乎、渦紋乎、知らず彼は什麼の渦紋を織れる。

其一　元祿の日本

地上の樂苑。元祿時代、國民大得意の絶頂。孰か國力の大滿盈國民の大得意を齎らしたる顯象にあらざらん。思想界に來れる第一の潮流、古學研究の大傾向。思想界に來れる第二の潮流、現代的氣運、應用の時代。

元祿の政は延喜に勝れり。元祿社會の反面、大自由大放供。花飛ひ蝶舞けども人戀へす。盈るは缺くるの始なり、得意は失意の始なり。彼等は先つ富と衝突せり。人生の既味、人生詩の興起。エリサベス朝の英國。エリサベス朝の英國は誇るへきシエーキスピアを有せり。近松門左衛門に出る偶然にあらす。

地上の樂苑

元祿時代、國民大得意の絶頂

大東洋の北、日本海の南、一帶の翠陸横りて波濤の間に起伏すること七百里。皓潔なる富嶽の聳ゆる處、清冽なる琵湖の開く處、野に離披たる萬頃の稻禾あり。岡に燦爛たる千樹の櫻花あり。日麗かに風芳はしく、宛として地上の樂苑たり。

武俠なる日本民族が南方紫島の一角に上陸し、此處に日本國家を打建てゝより二千載。秀靈の氣の磅礴する所一種の美俗は汩々として張り落る歴史の流と共に下り、江戸第五世常憲將軍の元祿時代に至て大勢潮の如く滿盈し來り國民大得意の絶頂に達し、前古未曾有

孰か國力の大滿盈國民の大得意を滿らしたる顯象にあらざらん

の文彩を煥發したりき。

王朝の盛時に於て八九百萬の間に在りたる日本の人口は今や二千六百萬に上りたり。桃山時代に於て一千八百萬石なりし日本の田圃は今や二千六百萬石に近づかんと欲するまでに開拓せられたり。奇品異物と貿易すべく慶安元年より寶永五年に至る六十一年間に金二百四十萬兩銀三十七萬貫目を輸出し、寛文三年より寶永五年に至る三十六年間に銅一億斤を輸出するまでに國内の富は膨脹したり。元龜天正の六雄八將時代を經て自由發達をなし來りし國民の材力は、今や尊嚴なる江戸政府の下に全く統一せられたり。文祿の昔に不敵なる遠征を試みたりし國民の敵愾心は、猶堂々たる國矜心として國内に充溢せり。戰國の日に輸入せられしゼシユエド派の基督教と泰西的新開化とに由りて物質文明の大飛躍をなし心靈界の大活焔を添へたり。

思想界に來れる第一の潮流、古學

りし學國の思想は、翕然として一意に文化を潤飾するに暇あらずなれり。江戸城日光廟の大建築は天下の眼を一新したり。東照公よりの學藝崇尊逸書上版は大に智識の分配と學術の勃興とを奬勵したり。支那明朝が滿人の壓破する所となり其遺民の隱元舜水等が來て我に投ずるや、彼等は其文學と佛教とを引出物としたり。鷹揚なる常憲將軍が思想の自由を開放するや、あらゆる新文物は春雨に逢ひたる春艸の若くに一齊に勃生したり。孰か是れ國力の大滿盈國民の大得意を齎したる顯象にあらざらん。偃武而降八十年の昇平は遂に國民をして戰國恐怖の時代を忘却せしめたるなり。彼等は唯大滿盈大得意に充ちて現代を樂むに餘念なきのみ。

實行の前には準備あり、此日に於ける日本の思想界は大に現代の趣味を味はんが爲に先づ古よりの材料の蒐集すべく取掛れり。即其第

研究の大傾向

一に隆まり來りたる驚くべき潮流は古學研究の大傾向なりしなり。恰も千古の經驗を一時に捃收せんと欲するものゝ如く、其勢滔々として一世を傾けぬ。

水戸義公が修史資料としての古書搜索は加賀綱紀侯の支那書蒐集と共に僞書著作の大流行を來すまでに秘書を發掘したりき。儒學は曾て一たび緇流に歸したるが爲めに其禪學に稍近からんと欲する程朱の性理說先づ藤惺窩林羅山に由て興され、一進して中江藤樹の陽明學となりしもの、古學研究の潮流に乘じて伊藤仁齋の經義的復古學となり、荻生徂徠の文辭的復古學となり、偏固なる宋學の素を以て日本神代史の講究を試みたる山崎闇齋の學は垂加神道となりて革命的氣習を帶べる國躰說を萌芽したりき。僧契冲加茂眞淵は國詩國文の古學を唱へたりき。僧靈空僧鳳潭等は佛敎の敎義を中興したりき。

思想界に來れる第二の潮流、現代的氣運、應用の時代

後藤艮山は醫學の古法を興したりき。狩野の武士的繪畫の外に土佐の公卿的繪畫も大將軍の宮中に召さるゝに至りき。林家の史は已に成りて水藩の史も亦方に爲されつゝありき。王朝の宮廷文學は北村季吟等の手に釋かれて紹介せられたりき。數學天文學は保井算哲關孝和等に由て大に興されたりき。

斯くて氣運が次第に現代的となり準備の後を蹈て實行の時至るに及び、古學熱に由て聚蓄せられたる材料は始めて大に應用せらるべくなりぬ。藤樹の陽明學は更に熊澤蕃山の實用經濟學となれり。徂徠の學は一方に經綸學となれり。朱學古學の包容を試みんとしたる木下順庵の學は才俊養成となりて桃李門に滿ち、亦現代的なる新井白石室鳩巢の政治學となれり。一方に於ては當時の貴族的文學たる儒學の主權が京都より東江都に移ると共に、學者的の學問は政治家的

の學問となり、宗教氣ありしものは弱氣を帶び、文人的のものは武人的となり、來世的のものは現代的となり、特殊的のものは普通的となり、以て次第に下層に向て洽普し、而して一方に於ける平民的文學は漸く向上の進路を取り、徒に言詞の巧を弄したりし檀林の短詩は哲學趣味を帶べる松尾芭蕉の俳諧となり、御伽草紙の神談鬼話は人事を寫す小說となりたり。斯の如く學問が漸く國民的となるに及び、世は單に和漢文の圓熟なる調和を以て滿足し能はずして、雅俗文をも同しく圓熟に調和し、以て一種の優美と勁健とを兼たる新普通文となし、而して最も自由に國民思想を發表し得べくなしたり。元祿武士は日本武士のきつすゐと稱せられたり。凡百の工藝技術は起れり。起業家には河村瑞賢の如きもの出て、海運治水に偉蹟を遺せり。富豪には紀伊國屋文左衛門淀屋辰五郎の如き者を出せり。藝

題を人生に求めんとする浮世繪は大に興りて英一蝶の丹青となれり。日本の演劇は悲壯なる一世市川團十郎の荒事となりて狂言茶番の滑稽戲を眞成の演劇となしたり。批評は安藤自笑江島其磧等に由て先つ演劇に加へられたり。六將軍の生母本莊氏が僧亮賢隆光等を崇尊するの故に由て佛敎は江戸三百年の隆盛を究め、將軍の祈願所として護國寺護持院靈雲寺大護寺は新に造られたり。將軍の寵姫右衛門佐局の嗜好に由りて幕府は一種の學問所となり、孔子の大成殿打建てられて、將軍は自ら經を講せり。將軍の他の寵姫阿傳の方の嗜好に由りて猿樂は諸侯伯を率ゐたる將軍自らに由て舞はれ、京都に於ても大に靈元上皇に好まれたり。唯り猿樂のみにあらず、今樣風流の舞も亦將軍の前に陳せられたり。

正に是れ京江一和四海伏樂し、武士全盛の時代として德川文明の頂

勝れり

元祿社會の反面、大自由大放佚

上に到達し、章々たる典禮の上に將軍は無上の尊榮を保てる時なりき。北村秀吟が贊嘆して『元祿の政は延喜に勝れり。』と云ひしも蓋し溢美にあらざりしなり。

此くの如く元祿の世は、一方に百度悉く擧りて典章文物燦然として千古の榮耀を極めたりしと雖、一方には社會の趣味が齊しく現代的となり、一大自由鄉として百事放佚自在となりし極、驕奢豪遊至らざるなく、麻絲紙捻を以て結はれたる髮は元結に換りて伽羅の油芳ばしき本多風の結髮其頭上に安置せらるゝに至り、絹半截若くは卷物三分一を以て作られたる婦人の帶は全絹若くは半截の卷物を其腰上に堆ふすることゝなり、留守居の夜會に至ては半宵にして數百金を費すも決して珍らしからさる所なりき。

忍が岡の櫻は盛者必衰の理を顯はせども、人は花にうかれて君樣の

十四

袂の色かと疑ひ、淺草寺の入相は諸行無常の聲をなせども、人は辻駕籠を山谷に飛ばす合圖と聞き、千代田城の大奥に榮華の春を誇りし阿傳の方は英一蝶に朝妻舟のあさましきを歌はれ、宮女繪島は增上寺詣に浮名を山村座の觀劇に流せり。犬公方の驕奢が如何に大なりしよ。「馬の物いひ」が如何に鳥獸の爲に萬丈の氣焰を吐て人類を罵倒せしよ。白柄卷の大小を閂差にぼつ込たる伊達男が六方に振分けつゝ歩み去る丹前姿の如何に勇しく當時に羨れしよ。玉緑笠に裏付の袴着たる優男が『ちらり〳〵と花めづらしき雪の振袖ちらと見た。』と謠ひ行く樣の如何にはでやかに當時に觀られしよ。日暖に五十三亭を渡る大小名の御入部が如何に花やかに出立れしよ。さても見事なおつゝら馬のしやん〳〵と響く轡の音に和して謠ひ來る馬子の小室節が如何に意氣に聞かれしよ。驛樓宮樹品川の西、落花馬蹄

十五

花飛ひ蝶驚けども人愁へず

盈ては缺くるの始なり、得意は失意の始なり

彼等は先つ富と衒突せり

を沒し、柳條別情を惹く。『長崎の寢道具にて、京の女腦に、江戸の張りをもたせ、大坂の九軒町にて遊びたし。』とは、快樂の極端を數へたる一大警語として當時の粹士間に語られたる所にあらずや。

要するに春風駘蕩たる元祿の日本は一大踏舞場なりき。花飛び蝶驚けども人愁ざりしなり。春風吹き暮れて人歸らざりしなり。

去れば元祿の春は歡樂極て哀情多く、一面は光明なれども一面は幽暗に、一面は春の色に誇れども一面は秋の來るを防く能はず、無慈悲なる時運の手は彼等に人生の眞味を味はしむべく生路の辛酸を貽れり。財政窮乏貨幣改鑄の止むべからざる日は來れり。爛熟たる春は已に一花を飛ひ初めり。故に戰國の昔は身躰財產の不安全なる、斯世を以て穢土となし假の宿となすの念に滿ちたりしも、今は斯世を以て歡樂場となし人間を以て最も趣味あるものとなすに至りたると共に、亦希望の無窮にして人間の有限なるを感ぜざる能はざりき。

人生の玩味、人生詩の興起

從て人間の哀歡に最も切なる同情を發せざる能はざるに至り、遂に人間を題目として人生を翫味すべく自ら禁じ得ずなりぬ。正に是れ大に人生詩の興るへき時にして、恰もエリサベス朝の英國と頗る其狀情を同ふしたりき。

エリサベス朝の英國

かの遠くは西歐洲の希望時代が中古の暗黑を破りて十五世紀末の曙色を催すに當り、獨逸の深林より捲き來りたる宗教改革の波は英國の一角より他の一角まで濺ぎて人心に新なる洗禮を與へ、大西洋の西には新なる世界發見せられて人智の區域全世界に擴まり、新月旗をさし翳したる中央亞細亞の蕃族が東羅馬帝國を破壞してコンスタンチノープルの古學伏魔殿を發くや、百千の奎星飛で伊太利の野に落ち、學藝復興の猛火となりて英吉利海峽の對岸にまで燃え移り、

エリサベス朝の英國は誇るべきシエーキスピアを有せり

印刷術の發明は思想の溝渠を社會に四通し、近くは謀叛人内に滅び、蘇國外に幷せられ、怒濤の如く押寄せ來りし西班牙王の大艦隊は海峽の夕波に沈み、國民思想方に大統一し大滿盈して、軒昂せる意氣の上に比類なき處女王の榮華を戴き、以て有らゆる人事を悉く大なる趣味に充ちて迎へ、醜美交錯、百物齊しく輝き、豪奢雲の若く、世は歡樂の海を湛へ、人は歌舞の波に漂ひたりしもの、豈英國に於ける元祿時代にあらざらんや。

而してエリサベス朝の英國は此の千歳の一時を歌ふべく千魂の詩人シエーキスピアを出したりき。元祿の日本は此の千歳の一時を歌ふべく百魂の詩人をも生ずる能はざりし乎。縱令我が元祿の國民は英國民の如くに世界的なる能はざりしにもせよ、縱令我が國民の閑見する局面は英國民の如くに廣からざりしにもせよ、縱令我が武士道の士氣は宗教改革の氣概と同じからざりしにもせよ、縱令我が英雄時代の侵略的遠征は英國民の大航海と其趣を異にしたりしにもせよ、縱令我が江戸將軍の統一が處女王の統一にあらざりしにもせよ、縱令我が古學研究の潮流が彼の學藝復興の潮流より小なりしにもせよ、我が出版術が彼の出版術に及ばざりしにもせよ、縱令彼の現代趣味が我の現代趣味より大なりしにもせよ、此くの如く其れ同じき事情に圍繞せられながら、焉ぞ彼にシエーキスピアありて、獨り我にシエーキスピアなからんや。縱令シエーキスピアの如くエリサベス朝を歌はざるも、獨り元祿時代を歌ふものなからんや。縱令シエーキスピアの如く英國民を歌ひ兼て人類を歌はんとする能はざるも、獨り日本國民を歌ふものなからんや。

然らば近松門左衛門が日本二千年の人生詩人として此の千歳一時の

衛門の出る偶然にあらず

元祿時代に出でたるもの、蓋し偶然にあらざるべし。

其二　彼の生涯（上）

烏の子に鷺を生みたるものにあらず

烏の子に鷺を生みたるものにあらず。彼が傳記は未詳なり神秘なり。文字の家。傳説。士家の兒。人生詩人の誕生。彼が幼時。僧となる。詩人となるの準備第一、佛學漢學。如何なる僧なりし乎。生涯の第一轉、近松寺を去る。岡本一抱子。衣鉢漂然京師に入る。搢紳家の臣となる。詩人となるの準備第二、邦學。生涯の第二轉、市井に放流す。失敗の生涯、流離變轉の生涯。人生研究の活教科。詩人第乏し奇才時に遇はず。

等しく春に逢ふも櫻の花は柳の枝に着かず。生れて元祿時代に逢へるもの元祿時代の人皆然り。然れども門左衛門の外復た門左衛門あらざりし所以は、豈彼にあらされば竟に彼たること能はざるに由るにあらずや。彼に千古の詩人たるへき彼が先天的資格を遺りたる父母は、恐らくは烏の子に鷺を生みたるものにあらざらん。

＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊　＊

彼が傳記は恰もシエーキスピアの如く其天才の大なるだけに其傳記は却て小ならざるを得ざりき。又其天才の神秘なるが如くに其傳記も神秘ならざるを得ざりき。

彼が傳記は未詳なり、神秘なり

彼が祖先は固より未詳なり。彼が雙親も同じく未詳なり。彼がミューズの神の寵任を帶んで此の美はしき大氣の中に呱々の聲を洩したる其地さへも亦未詳なり。唯彼が連枝骨肉の男女として歴史に記憶せらるゝもの中、兄に相國寺の宗長老あり、弟に學醫として聲名一世に重かりし岡本一抱子あり、妹に平民的短詩の師人として錦江あり。

文字の家

たるを見れば、彼が家の久しく筆兒と相親める家なることは推測し得て難しとせざる所なるべし。

傳說は彼が父母と祖先と其故鄕とにつきて其言を二三にしたり否五六にしたり。一の傳說は云ふ、『彼は長州萩の人にして毛利家の士杉森某の兒なり』と。他の傳說は云ふ、『彼は越前の人なり』と。更に他の傳說は云ふ、『三河の人なり』と。或は『近江の人なり』と。又『出雲の人にして、大原郡加茂村に今猶近松の稱を里落に冠らしむる處あり』と。他の一傳記は云ふ、『彼は周防國吉敷郡山口村の人なり、父を松村八兵衛といひ、彼が小字を藤四郎といへり』と。又他の一傳說は云ふ、『彼は長門國大津郡深川村に生る。父を相森主殿助三善廣品後中務元世といひ、鎌倉八奉行の一人たる三善康連の後にして、康連下野國鹽原郡太田莊を領し太田氏といひ、其五世信濃守時直周防國玖珂郡相杜鄕蓮花山に居りて相杜と稱し、更に五世にして房康なるものあり、初め大內氏に屬し、大內氏滅ひて毛利氏に仕へ移て長州深

川村に住せり、是れ門左衛門が五世の祖なり』と。或は云ふ、『彼は藤氏なり』と。或は云ふ、『彼は平氏なり』と。或は云ふ、『彼は初め敵岳の僧なり』と。或は云ふ、『彼は近江の高觀音近松御坊に在りたるものなり』と。而して彼が兄弟の一人たる岡本一抱子を傳するものは、其本姓の杉森にして世々士籍に列し出て丶員家を繼きたるを說き、『祖杏園醫を以て豐太閤に仕へ法印に敘せられ、父受慶福井侯に臣として法眼に敘し、一抱三世爲竹を襲稱して京師に徙り居たり』と云へり。

所說紛々亂絲の如く、此の千古の詩人に因緣あることを誇り、此の千古の詩人と其鄕國を同ふせるを誇らんと欲する後人の假托は、遂に茫漠として彼は唯日本の彼なりといへるを意味するの外、復た何等の意味をも告げざらんとするまでに、其眞否を辨ずべからざらしめぬ。

然れども詳に之を察すれば、彼が家の世々士林に班して杉森氏と稱したることは、異日彼か自ら終焉の辭を作りて『代々甲冑の家に生れ』といひたりしを見ても明かなるべく、彼が時々採用したりし故國的方語の長崎近傍に行はるゝものありしを見ても、彼が長門附近の地に生れて肥の唐津に育せられたりと傳ふるもの、最も眞に近しとすべきに似たり。豈彼が父は嘗て毛利家に在りて彼を殘しつゝ越前藩に去りたることあるにあらざる乎。而して彼が家の弟兄が武人多くは字を知らざるの日に於て揃ひも揃ひて文學趣味に富みたりしを見れば、豈其家の醫を業としたるを證するにあらざる乎。縱令醫を業とするに至らざりしとするも、其學癖ありたる家に生れしことは信せざらんと欲するも能はざるべし。

人生詩人の誕生

請ふ吾人をして吾人が見る所を以て、彼が生涯の曉を描寫せしめよ。

尊嚴なる大猷將軍は歳月の力に敵し得ずして人類の舞臺より其後面に沈めり。少弱の主新に立ちて、油井丸橋等浪士の陰謀は智慧伊豆に摧破せられたり。天下の諸侯伯は嫌疑を恐れて故らに遊樂を事とせり。而して上の好む所下これより甚しく、全國の人を擧て唯太平の文飾に維日も足らざる時となれり。元祿文學の粹美を抽て國民の性情を歌ひ出したる彼は、實に此の大猷將軍の沒後第三年承應二年を以て彼が大江戸時代の花たるへき天職を帶びつゝ西部中國の一隅地風清く樹綠なる處に於て始めて斯世の錯に編入せられたりき。

彼が幼時

彼が父彼が母の如何に彼を愛育せしやは今之を知るべからず。彼が父彼が母の如何に彼に遺傳すべく何樣の性癖を有したりしやも今之を知るべからず。又彼が彼が父彼が母に其乳臭時代の感化を受くべく如何に久しく其膝前に戲れたりしやも今同しく之を知るべからず。然れども彼が父母と共に棲みたりし時日のさまで久しきものにあらずして、彼は夙に自ら立ち自ら敎育したる人なることは、必然の結果として推測するに足るものあり。何となれば彼は八九齡若くは十齡前後に於て早く已に前肥唐津の臨濟宗近松禪寺にありたるべければなり。

僧となる

近松寺に在りたる彼は固より一の僧侶たるへき準備の外に何等の爲す事もなきものなりき。然れども彼が異日の大詩人たるへき基礎は則ち此間に於て作られ、彼が佛敎及ひ漢學の修得は其躰軀の成長と共に此日に於て成長したるものゝ如し。彼が夙に穎悟强記にして大なる速力を以て進歩したりしとは、世の之を傳ふる所なり。

詩人となるの準備第一、佛學漢學

彼が著作を讀めるものは知らん、彼が北九州若くは西中國に近き山川市邑を叙したる地理の、其東國を叙したるものゝ如くに不精確なるにあらずして、唯に書籍の中より之を得たりと見るべきよりは身自ら其地を蹈で之を得たりと見るべきもの決して少なからさることを。而して其濱海の風光を叙説する如きは、坐ろに風黑き北海の天若くは春波暖かに紅霞を隔てゝ温藉たる山光を望むべき内海の風色を想はしめ、又天遠く砂白き玄界灘の波打際或は水天渺茫たる松浦海上の風雲を想はしむ。彼が思想の故郷は西部中國より唐津近傍に至る間に於て其幾分かを尋ぬべし。唐津は實に彼が詩想の搖籃なりしなり。

彼は此時其頭を圓顱にして古澗と呼ばれ、後一寺の主となりて義門といひたりしとも云ふ。去れど彼が佛弟子としての生涯は年二十の

如何なる僧なりしか

生涯の第一轉、近松寺を去る

後には其多くを延長するに至らさるべしと推測せらるゝを以て、彼が一寺の主人となりしは未た遽に信すべからざるに似たり。

斯くて彼は遂に其勃々たる才思を抱て、朝々梵唄の聲を松濤波響に和せしむるを以て滿足し能はざりき。彼は今や其寺を去るべく決心しぬ。

何故に彼が斯く其住みなれたりし寺を去るべくなりし乎を解釋するもの、亦古來幾樣の傳説をなしたりき。曰く、『彼は一塔中に弘教するを衆生化度の功廣からずと大悟したるに由る』と。曰く『彼は桑門を嫌ひたり』と。曰く『故ありて』と。

去れと彼が假稱して近松門左衛門といへりし所以を説明するもの、『彼が近松寺に在りたる時寺僧罪ありて門側に刑せらる。彼之を見て自ら戒め、稱して近松門左衛門と云へり』といふを信なりとせば、

岡本一抱子

衣鉢漂然

彼が近松寺を去りたるは、必す何等のか故ありしものなるべく、而して衆生化度の大願望の爲と謂はんよりは、寧ろ桑門を嫌へりと謂ふを其眞に近しとなすべく、又果して彼が戒名の他の僧の刑死を見て自ら戒めたりしものならんには、彼が之に連累せしや否やは未だ遽に知るべからされども、彼かゴ然として去るを餘義なくすべく近松寺門に大に記臆すべき出來事ありしに由らずんばあらざるべし。

彼が兄弟の一人たる岡本一抱子が、初昧岡三伯の高弟として其師を凌んと欲し、才を恃んで行なく、遂に破門せられて別に一家言をなしたるを見るに、若弟兄にして相似る所あらは彼亦決して齷齪として久しく無爲無事なる寒寺に在るべき者にあらざりしならん乎。是に於て彼は衣鉢漂然其年少時代と共に忘るべからざるの記臆をとゞめたりし近松寺を背にし、九州北海岸の眺望に囁き山陽道の風光に彷徨ひつゝ、春風秋雨京師に入りたり。是れ彼が生涯の一段落にして、其佛弟子時代より更に一轉すへき過渡なりしなり。

而して彼は佛弟子たるに成功せずして京都に入り、還俗して杉森平馬信盛と稱し、一條家に仕へて雜掌となり、叙せられて從六位に至りたりと傳ふ。自ら巢林子平安堂不移山人等の別號を稱しゝは蓋しこれより以後の事なるべし。

京師に入る

搢紳家の臣となる

隱人となるの準備

第二、邦學

偶古學研究の熱は大に京師を襲ひき。而して京師は當日秘書の倉庫として最も研修に便宜ありき。元より學問好きの彼は此際其多暇なるに乘じて、古書を亂抽し、我邦の典禮故實歴史物語謡曲雜藝等の書を多讀するを禁する能はざりき。亦其詩人的手腕を養ふに於て少なからざるの補益を得たりしもの。

生涯の第二轉、市井に放流す

然れども彼が仕官的生涯も其佛弟子たる生涯と同じく、亦彼をして成功せしむる所はあらざりき。家格職祿に嚴格にして超ゆべからざるの制限ある仕途は、固より人材を容るゝに餘地あらざりしならん。加之京師は到底仕官の地にあらざりしなり。是に於て乎彼は一種の意味に於ける墮落の淵に沈みぬ。遂に市井に放流して自適逸遊すべくなりぬ。

失敗の生涯、流離變轉の生涯

要するに彼が少壯有爲の時代は失敗に充ちたる生涯なりしのみ。辛酸に暴まれたる生涯なりしのみ。又流離變轉の生涯なりしのみ。然れども彼が一世の詩人となりたる異日よりして之を見れば、其失敗辛酸流離變轉の歷史は恰も彼が人生研究に最も適切なるべく與へられたる活ける教科書なりしなり。

人生研究の活教科

彼が弟兄や四人、而して一も繼承して士人たりし其父の事をなすも

詩人窮乏し奇才時に遇はず

の莫し。宗長老の相國寺に僧となれる、彼の近松寺に送られたる、岡本一抱子の舅家を承けて醫となれる、妹錦江の大坂に在りて俳諧の女宗匠となれるを觀るに、彼が父は實に彼等に先ちて已に流落したるものにあらざるやを疑ふべし。

然らば世故は彼等が教科として自ら已れを教育すべく早く已に彼等に課せられたるものにあらざる乎。難難は彼等が教師として自ら自家の命運を定むべく早く已に彼等に與へられたるものにあらざる乎。詩人窮乏世常に多く奇才時に遇はざること古來然り。

其三　彼の生涯（下）

社會は往々人材を冷遇す。彼は失敗によりて失望するよりは大量なりき。延寶の京都、宇治嘉太夫。始て戲筆を把る。都萬太夫。井上播磨。竹本筑後掾と相知る。義太夫。日本戲曲史に一大特筆すべき事。始て義太夫の爲に作る。竹本宇治競爭。大坂に移りて劇場内の詩人となる。弟兄相爭ふ。龍田脂。彼が妻。彼が家庭。竹田出雲。義太夫死す。死、元祿文學の花凋落す。終焉の辭。

社會は往々人材を冷遇す

彼は失敗

社會は往々人材を冷遇して陰險に猜疑に深酷に激勵に憤慨に沈痛にし、以て一種の狂味を帶びたる崇高の情を歌はしむることあり。少陵の杜氏さへ猶此の殘忍なる奬勵に由て亦悲觀詩人の一人となりしを免るゝ能はざりき。

門左衛門に至ては自らこれと同しからざるものあり。彼が才氣は固より彼を驅て尋常一樣の聲譽に滿足するを許さゝりしと雖、彼は其不滿足に由りて憤怒するよりは寛容なりしなり。又其不成功に由りて失望するよりは大量なりしなり。加之彼が不成功不滿足は寧ろ自ら好んで之を求めたる所なきにあらざりき。彼は僧侶としての寂寞なる生涯よりは公卿の臣たるを擇びしなり。彼は公卿の臣としての無事なる生涯よりは市井に放遊するの自由を擇びしなり。斯くして彼は窮屈なる衣冠を全く擲棄したるなり。

によりて失望するよりは大量なりき

延寶の京都、宇治嘉太夫

彼が仕へて搢紳家の臣たりし延寶の頃に當り、太平時代の粉飾物たる學問及ひ音樂遊戯は大に興れり。京都は宇治嘉太夫の淨瑠璃到る處に評判せられたりき。宇治は豪怪不熟なる東淨瑠璃を京都的の纖婉に變じたりしもの、淨瑠璃樂の完成に與て偉勳ありたり。而して此時無事に困殺せられ又齷齪たる俗務に倦殺せられたる彼は漸く遊蕩

に誘はれて其足跡を芝居雜藝の門外に印するに至りき。宇治が芝居の如き最も多く彼が遊意を惹きたりしもの。

時に四世將軍の政綱次第に弛みて昇平華奢の俗日に長じ、攻學の流行と共に著作の時代來り、世上滔々支那學に歷史に論議に考證に解釋に新作に和文和歌隨筆雜記に小唄に俳諧に小說に、多少の文才あるものは皆其爲し能ふべき何事かを書かんと欲せざるはなきの日近づきぬ。文學海の漂流者として成長したる彼は忽ちに其戲筆を弄せずに其技癢心を禁じ得ざりき。

始めて戲筆を把る

鄙蔑太夫

彼は詩人的生涯に入りて先づ都萬太夫が歌舞伎演劇の爲に作る所の者ありたり。而して延寶五年十二月宇治嘉太夫加賀掾の稱を得て盛に新曲を演せんとするに及び、彼は其請に應して新戲曲若干を作れり。是彼が所謂淨瑠璃を著したる始にして、初め餘閑を以て戲に筆を執りたりしもの、後漸くに主として事に是に從ふに至り、遂に仕を辭して其弟岡本一抱子の家に在りて專ら戲曲著作を事とせり。

而して彼が宇治の爲に作りし新戲曲の受けたりし喝采は更に浪華の井上播磨をして同しく新作を請けしむるに至りぬ。播磨は寛文の頃より一流を語り出たして浪華に在りたるものなり。

井上播磨

既にして機會は彼を其天賦たる詩人に大成功せしむべく彼を迎へぬ。彼は竹本筑後と相知るに至りたり。

竹本筑後と相知る

是より先攝の東成郡四天王寺村の農人五郎兵衛あり。五郎兵衛淨瑠璃を好むこと殆と天性に出で、曩に井上播磨の門弟子清水理兵衛に學びて出藍の名あり。延寶中浪華虎屋若太夫の劇場に上り、天和の頃京都に入りて宇治加賀掾が四條河原の舞臺に顯れ、稱して清水理太夫と云ひき。彼謂ふ、『播磨が流は地節長ふして、音を表とし節を

日本戲曲史に一大特筆すべき事

裡に罩めて語り、加賀が流は地節短ふして、音を裡に隠し節を細に語り、兩流未た節章句全からず。いでや播磨が長きを縮め、宇治の短きを伸ばし、音の表裡を備へ、節の長短を交へて、序破急と定め、以て一流を立てん』と。則ち浪華に歸りて木偶劇場を道頓堀に創し、竹本義太夫の名を以て新曲を語れり。時に貞享二年にして、即ち淨瑠璃樂を大成したりし竹本筑後少掾是なり。

是れ門左衛門が相得て各其事を成就するに至りたりしもの。近松なければ以て竹本の淨瑠璃を成す能はず、竹本なければ以て近松の詩才を發せしむるに足らざりし彼等は、料らずも共に宇治加賀掾と關係する所あるの故を以て遂に相知るを得たりき。此の奇遇は獨り彼等が爲に一世の大事なりしのみならず、實に日本戲曲史上に一大特書すべき出來事なりしなり。

始て義太夫の爲に作る

竹本宇治競爭

大坂に移りて劇場内の詩人となる

斯くて義太夫は木偶劇場を開きて、貞享二年二月先づ彼が宇治の爲に作りし「世繼曾我」を場に上らじめぬ。而して社會は之を喝采したりき。斯くて彼は貞享三年二月初めて義太夫の爲に新に「出世景清」を作りて之を送りたりき。而して社會は之を喝采したりき。是より彼は義太夫の爲に陸續新作すべくなりける。

此時井上播磨は已に貞享二年五月を以て沒したりしも、京都は宇治加賀掾正に盛にして、二人遂に京坂に對峙して相競ふに至れり。

貞享三年加賀掾義太夫と其技を鬪はしめんが爲に進んで大坂に入り、事勝たずして引還しぬ。

光陰匆々矢よりも疾きは古よりして然り。其弟の家に寄食して家をなさず、徒らに戲筆を弄して逸遊是れ事としつゝありたる彼は、忽ちに杉の板戸の罅隙を過ぐる白駒に送られて今は其第三十八回の新

年を迎へぬ。而して當日のならひとして戯曲著作は、之を幇間俳諧師等の業として賤視したるに由り、彼が事に是に從ふは其兄弟の深く好まざりし所にして、一抱子の如き最も之に不同意なりしなり。是に於て彼は元祿三年正月義太夫の招聘を機として其の弟の家を辭し、京都より移て大坂に之けり。

弟兄相爭ふ

是より彼は全く劇場内の詩人となり、遂に著作に由て自ら衣食すべく其身を定めぬ。

此の前後の事なるべし、一日一抱子彼を訪て、其よしなき戯作を事とするとを諫む。彼曰く、『其許には和語の藥名の書などを作りて、一字一畫の誤あれば人の性命にかゝる大事のことなり。我等が作る所は狂言綺語にして人に害あるにあらず。』と。一抱子聽て其理に服し、方に草しつゝありたる「素問醫解」の將に成らんとするを止め、

復た醫解の醫書を作らず、相和して共に大和に遊びたりき。世久しく窮巷の學童が其習字帖としたりし「龍田詣」は、彼が此時其弟に與へて遊期を刻せんと欲したる書翰なりしと傳ふ。

秋風落葉弟兄手を攜へて名所舊跡を巡る、此行の快なる彼が豫想したりし其書翰の辭に由て察するも自ら餘りあるべし。曰く、

内々龍田詣の事、やうやく紅葉も時を得べくおりに候。いつ頃思召たゝせられ候哉、可レ任其許御勝手次第に候。去ながら此月中可レ然存候。隨御返事に此邊の衆中可申合候。道筋の趣は兼て大和路一望の事に候。先南都に差かゝりて、春日の御社、若宮、夫より興福寺東大寺等の伽藍を始め、新八幡猿澤の池衣掛柳采女の宮、其外堂塔佛閣遂拜見、當所にしばらく滯留し、龍田詣成就いたし、法隆寺三輪在原寺石上蟻通の宮を拜禮し、初瀬に參籠し、多武の

峯は大職冠鎌足卿の御廟所、是藤原氏の鼻祖とかや。偖吉野には下の權現、上には藏王權現立せ給ふ、是役の行者一刀三禮にして刻みたるとなり。御本地はすなはち釋迦千手彌勒の化現たり。

鷄柄の領發心門は弘法大師の御筆なるよし。西河の瀧をうちながめつゝ、漸和泉路にかゝりては、後醍醐天皇假に籠らせ給ふ笠置寺、補正成城郭を搆へられし金剛山、麓に千早の城、これらは街道よりはるかに西に見へ渡るよし。生駒山、尼上か嶽。當麻寺は中將姫の古跡なり。本堂金堂絲繰堂蓮の絲の曼陀羅織殿の間、左は大師手習の間、腰懸石、染の井、同く紫雲庵、絲かけ櫻。片岡過て達磨寺清水堂志貴の毘沙門天、立田河のながれは今もなほ中たへず。頭を回せば遙三熊野の浦。彼方に淡路島和歌の浦。摂津國に住吉四所明神、岸の姫松幾代經ぬらん萬代の池。天王寺は往昔聖德太子守屋大臣を誅伐以後の草創にて、佛法最初の御寺なり。石の鳥居は釋迦如來轉法輪正等、極樂土の額は空頭小野道風の筆跡とかや。石の舞臺龜井の水雲龍堂庚申堂堺の濱高津志貴津難波津御津の浦つたひ、此地におゐて案内をたのみ可申哉。名處舊跡の望み一返の事ゆへに歩行路もたのしみに興あらん歟。大坂御城下に一宿し、淀船に掉さゝせ、橋本より八幡へぬかづきたる上、石清水放生川を過、高良神宮寺また女郎花塚などをも相たづね、老少ともに疲勞しはんべらば、山崎寶寺水無瀬川、是らは重ねてのたのしみとし、雄山より宇治の里を經廻し、平等院扇の芝苑道橋眞木の島朝日山惠心院山ふきの瀨に春をちぎり、興聖寺、それより黄蘗隱元禪師圓碁に萬福寺本堂食堂のこらず順禮し、すなはち小倉つゝみより豊後橋にてしばらく憩ひ、御香の宮深草極

彼が妻

樂寺藤のもり稻荷道すがらゆるゝと參詣いたし、罷歸り申べく候。なをまたひがし山の參詣近日の條、心緒期其節候也。穴かしこ。

而して彼が其妻を迎へたりしは、大坂に下りて多少の時日を經たる後なるべしと想像せらる。

傳ふる所に據れば、彼が妻は大坂堀江の鑄物師山城屋宗左衛門の女にして、彼女は彼と共に寺島(今は松島)の船大工尼崎屋吉左衛門に何等かの關係ありたるものなりしなり。彼は實に老後退隱して尼崎屋に在りたることもありしといふ。

彼が家庭

而して彼女が如何なる人なりし乎は、固より之を知るものなしと雖、彼が常に寫したる所の女房氣質にして幾ど悉く温良貞淑ならざるものなきを見れば、彼女は實に之がモデルにあらざりしやを疑ふべし。」

顧ふに彼が家庭は、極めて質素なる快樂に充ちて彼を安んぜしめたるものなりしならん歟。辛酸零落を經來りたる彼が一代史も、其後年の一部分は思の外に慰藉安愉の地ありたるものゝ如し。

竹田出雲

寶永二年三月竹田出雲竹本座の座元となれり。出雲は後彼に學んで戲曲を作り、遂に其業を繼くに至りたりしもの。

斯くて彼は年々一二種若くは二三種の戲曲を草しつゝ其日を消じたりしが、大坂に移りてより廿五年正德四年四月十日に彼が最親の友たる竹本筑後少掾義太夫を年六十四にて失ひぬ。乃ち彼は此の生前第一の友たりし彼の死を悼み、其畫像に贊して斯く言ひけり。

義太夫死す

堪能の人のいひしは、『節に節あり、節に節なし。言葉に節あり、言葉に節なし。語るに語りて、節に語るな。』と、此六句のものは得安き樣にて、得難きのみ。よく得たる人は誰ぞや。

前筑後掾藤原博敎

死、元祿文學の花凋落す

終焉の辭

一ふしをかたり殘してうつし繪に、

今も聲ある竹のおもかけ。

是より彼は猶竹本座に在りて、筑後が弟子にして後に一派を創して豊竹越前掾と稱しゝ竹本若太夫及ひ竹本播磨少掾等の爲に幾多の著作をなし、「右大將鎌倉實記」を絶筆として享保九年十一月廿二日(或は云ふ廿一日)其七十二年の秋の半に、彼は更に神の國の榮を歌ふべく其藉を彼の世に移しぬ。彼が山もなく川もなく平々他の奇景なき七十二春秋の長き生涯は、此の數頁の短き而も半は不明なる傳記を殘して終りぬ。秋風飄零、元祿文學の花は終に凋落せり。

此の最も少なく自家を説明したりし彼は、死に先ちて自ら終焉の辭をなし、以て纔に自家説明の責を塞ぎぬ。

代々甲冑の家に生れながら武林を離れ、三槐九卿につかへ、咫尺し奉りて寸爾なく、市井に漂て商賣知らず。隱に似て隱にあらず、賢に似て賢にあらず、ものしりに似て何も知らず。世のまがひもの。唐の大和のをしへある道々、技能雜藝滑稽の類まで知らぬものなげに口にまかせ筆に走らせ一生を嘲りちらし、今はの際にいふべく思ふべき眞の一大事は、一字半言もなき倒惑。心に心の耻をおもひて、七十餘りの光陰、おもへばおぼつかなき我世經畢。

もし辭世はと問人あらば、

それ辭世去ほどに扨もその後に、

のこるさくらの花しにほはい。

享保九年仲冬上旬

入寂名阿耨院穆矣日一具足居士、

不レ俟終焉期豫自記。春秋七十二歳。

のこれとは思ふもおろかうつみ火の、

宗長老、錦江
岡本一抱子

著書

けぬまあたなるくち木かきして。

四十八

〔註〕宗長老、錦江、其傳を詳にせず。

岡本一抱子、通稱は爲竹、一得齋と號す。本姓は楊森出でゝ外家を嗣ぐ。京師に居り、味岡三伯に從ひて、「素難」を講ず。初め京師の醫家「素難經」を講ずるもの纓庭東庵を嚆矢となし、門人味岡三伯に至り藥方に盛にして學徒群集す。一抱子之が高足たりき。唯細行を修めずして醫三伯の意を失し、遂に師弟の義を絶たる。一抱子因て一家言をなし、諺解を作りて初學を訓誨するを己が任となせり。其書大に行はる。著す所、「運氣論諺解」七卷。「原病式首書」四卷。「醫學三脳辨解」六卷。「醫學講談發端辨」二卷。「子四經絡詳解」七卷。「衆方規矩指南」七卷。「秘傳藥性記辨解」三卷。「修治纂要秘訣圖緯」七卷。「病因指南」五卷。「妙藥集大全」。「薛氏醫案和解」五卷。「和語本艸綱目」二十二卷。「脉法指南」六卷。「醫療指南」五卷。「和語醫療指南」五卷。「本朝古今醫統」十卷。「萬病治法指南大全」八卷。「方意辨疑」二卷。「藥性記辨解」三卷。「醫學切要指南」三卷。「同續」三卷。「藤涸集和語抄」七卷。「正傳或問諺解」七卷。「大成論和語抄」七卷。「古今發生論和解」。「阿是要訣」五卷。「經穴密語集」三卷。「鍼灸拔萃大成」七卷。「萬病回春指南」五卷。「醫學至要抄」四卷。「格改論諺解大成」七卷。「素問諺解」十八卷。「灸法口訣指南」五卷。「針法口訣指南」一卷。「年中運氣指南」一卷。「北條時賴記」十卷。「百味主能諺解」五卷。「局方發揮諺解」五卷。「腦腑經絡詳解」五卷。「醫眞君活人方」二卷。「十四經和語抄」。

彼等が血族の文學趣味

彼が友の一人法眼鈴木宗因は、彼を稱して『博綜群書、弘覽經史』と云ひたりき。其著す所を見るに、理義精覈、博覽にして活眼あるものにあらざれば能はず。四十一種二百二十餘卷の醫書の外、著す所演義的小說「北條時賴記」十卷あり、筆力健達にして行文明暢なり。亦彼等が血族の文學趣味に富みたるを見るべし。

竹田出雲

竹田出雲は千前軒と稱し、名を清定といひき。其先阿波の人なりしが、父清一、江戸に來りて清定を生み、後攜へて京師に入り、機關人形を創製して木偶劇を演ず。萬治元年出雲椽の稱を得寛文二年大坂に下れり。後近江椽と改め、長子清英に家を繼がしめて近江椽と名乘らせ、次子清定に出雲椽を稱せしむ。清定寶永二年三月竹本座の座主となり、享保八年三月に至り、初めて「大塔宮曦鎧」を作り門左衛門に請ふて添削せしめき。遂に門左衛門に繼て戲曲作者となる。

師として の近松

出雲の趣向

彼は松田和吉と謀りて「大塔宮曦鎧」を作りし後、一個にて「三國志鼎軍談」を作り、之を門左衛門に示したりしが、門左衛門未可として細に其秘訣を說きたりき。

彼は其後非常なる精苦を以て「大内裡大友眞島」を作りて之を門左衛門に問ひたり。門左時に病褥にあり。彼枕頭に就て之を讀む。中に兄弟身暨りとなり居るを二人の妻知らずして、互に我が夫と思ひたがへて爭ひ、後に始終を聞て驚くところあり。門左衛門枕を欹て莞爾として曰く、『是なり〳〵、斯く見物は先よりして仔細を知れど、人形は知らずして爭ひ驚く。こゝらが大に見物の悅ぶ所なり』と。出雲が終生の傑作と稱せられたる假名手本忠臣藏の如き亦此趣向を利用して、勘平は父の仇を打ちしを知らずして切腹し、觀客は是を知りて問へ殘念がりて、大評判を取りたり。

「忠臣藏」は出雲結構し、三好松洛並木宗輔等各受持を定めて作りたるものなりしが、劇中第一の立物たる由良之助の初めて出る所並木千柳之を受持ち、如何にして之を出すべき乎と工夫し、此の大立物の四段目まで出でず今始めて出る所なれば極めて大切の事なり。主家の大變を聞きて取物もとりあへず來らば其威儀を損すべく、去り迚主君の死に臨める所に落付顏に勿体ぶりても出されず。止むを得ず之を出雲に誂りたりしに、彼曰く、『足下は左衛に陪侍をかれて思案をさるゝ故趣向出ざるも由良之助國許に在りて此大變を聞き、晝夜分かず馳せ着き、既に今日上使來りて判官切腹に及ぶことも聞たるなるべければ、日頃の仁恥を捨ていかにも狼狽へあはたゝしく出るやうにせらるべし。是れ由良之助の仁躰を捨たるところ由良之助の仁躰を見するといふものも也』と。千柳膝を拍ち喜ひ其工夫の如く、判官が腹へ突たつるトタンの拍子パタ〳〵にての出端、意外に驚きたる觀客は大に之を喝采したりき。

出雲が著作は、「假名手本忠臣藏」、「菅原傳授手習鑑」、「義經千本櫻」、「薩摩屋遺滿大内鑑」、「小野道風青柳硯」を始め、「大塔宮曦鎧」、「鼎軍談」、「大内裡大友眞島」、「伊勢平氏年々鑑」、「七小町」、「三併太夫五人嬢」、「工藤左衛門富士日記」、「加賀國鑛原合戰」、「尼御臺由井濱出」、「眉間尺象貫」、「甲賀三郎窟物語」、「小栗判官車街道」、「花衣いろは綠記」、「男作五人歴金」、「兒源氏道中軍記」、「傾城枕軍談」、「双蝶々曲輪日記」、「菖蒲前操絃」、「小袖組貫線門平」、「崇德院讃岐傳記」、「平惟茂凱陣紅葉」、「昔男春日小町」等、或は獨作し、或は他と合作したる

著作

ものとす。

寶暦六年十月二十一日年六十六を以て終る。其絶命の詞に、

影涼し、水に彌勒の腹袋。

井上播磨

井上播磨掾、通稱は市郎兵衛、京師に住し大内の御旛を作りて生計とす。初謠曲を學ひ遂に虎屋源太夫の弟子となりて淨瑠理を學ぶ。古流の音節に心をつけて工夫し、江戸萬歲の音によりて發明する所あり、之を林と なして一流を出せり。後大坂に行き寛文の頃より世に行はる。乃ち淨瑠理芝居の免許を得、井上大和掾と稱し尋で播磨掾と改む。貞享二年五月十九日、京都に沒す。年五十四。

宇治加賀

宇治加賀掾は紀伊和歌山の人。伊勢島宮内の弟子となりて淨瑠理を語り、宇治嘉太夫と稱せり。此頃井上播磨の淨瑠理大に行はれしが、彼はこれによりて工夫し、別に一派をなしたり。寛文の頃宮内の名代として芝居を興行し、延寶五年十二月十一日宇治加賀掾の稱を得新作の淨瑠理を語る。此時近松は彼の嗣に應じて初めて著作を試みたりき。彼が音節はやはらかなるを以て勝る。貞享の頃大坂に至り又京都に歸り、京都に在りて淨瑠理の霸權を握るを

三十年。寶永八年正月廿一日(或は云ふ八月十一日)七十七を以て終る。

竹本筑後少掾は攝州東成郡四天王寺村の農夫五郎兵衛なり。生來淨瑠理を好み井上播磨の弟子清水理兵衛に學び、上京して京都四條河原の芝居にも出で清水理太夫と號しき。

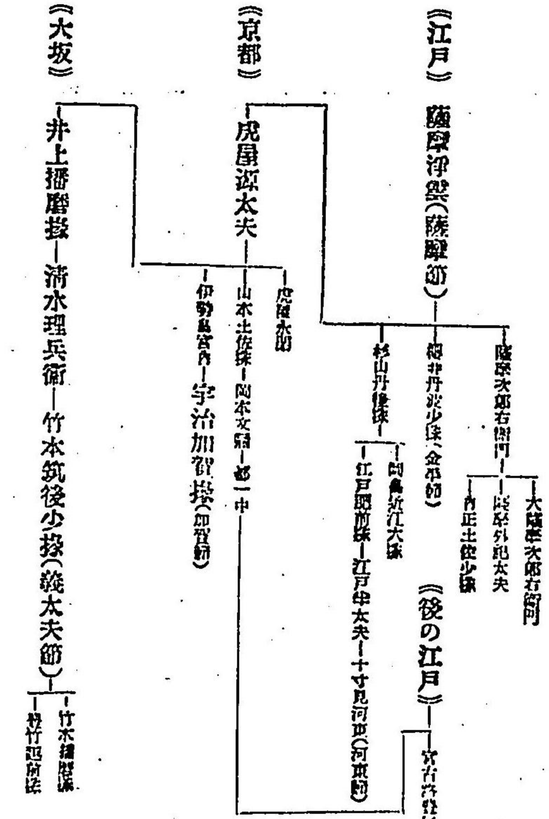
延寶中大坂虎屋嘉太夫が芝居に出で天和中京都に行き、宇治嘉太夫の芝居にも出でたりと傳ふ。

遂に播磨の短と加賀の長とを折衷して最も完備したる一流を成し、貞享二年竹本義太夫の名を以て大坂道頓堀に木偶演劇を創せり。其始めて語りしは近松が宇治の爲に作りし「世繼曾我」なりき。

元祿十四年五月竹本筑後少掾と稱し、常に近松の新作を語りぬ。寶永元年座元をやめて竹田出雲に讓り、正德四年九月十日年六十四にて病沒す。

貞享より正德まで三十年間に其語る所百六十餘番なり。遂に淨瑠理は即ち義太夫節、義太夫節は即ち淨瑠理なるに至りぬ。

淨瑠璃傳統



其四　彼の詩人的生涯

如何にして戲曲作者となる乎。自墮落者。荊山の璞。詩人生涯の四時期。前半生涯。第一期普通修業時代。三小期。普通修業時代の第一小期。普通修業時代の第二小期。普通修業時代の第三小期。戲曲表情術の自得。人生詩たるに着意す。活文術に着意す。省筆法に着意す。第二期高等修業時代。社會戲曲。幾理。後半生涯。第三期得業時代。彼が美の解釋。第四期成熟時代。天空の鳥來りて其枝に宿る程の樹となりぬ。

人あり近松半二に問ふに如何にして戲曲作者となるべき乎を以てするや、彼は言へりき。『堂上の事を知らば有識者となるべし。弓箭の故實を知らば軍學者となるべし。聖經賢傳を記憶せば直に博識の儒者となるべし。菅公の事も楠公の事も丸呑に似つこらしく書いて、聞いた程の語を奥深げにつばらかし、和歌管絃より萬の道何一つ正

自墮落者

荊山の璞

しく覺えたる事なく、聞取法問、耳學問、根氣をつめて學ぶ事のならぬ自墮落者が即ち作者となるなり』と。

門左衛門の其天職を執るべく始めたるも實は此の一種の自墮落者として始めたるに外ならざりき。僧となるべくして僧とならず、縉紳家の臣となるべくして縉紳家の臣とならず、佛書漢書和書を亂讀して一藝一能に身を立ること能はず、遂に市井に放遊して時に其戯筆を弄したりしもの、弄筆の性癖は何時しか彼を全然著作の人に導き、彼が天才と彼が四圍とは竟に彼を此の人生の粹美を歌ふべき地にまで推薦したりしなり。

然れども彼が天才は暗中に投せられたる玉の如く卒然として其光を四射したる者にはあらざりき。彼が天才は荊山の璞の如くに千琢萬瑳して而して後に始めて連城夜光の名璧となりたるもののみ。彼は

教育の人なりしなり。進歩の人なりしなり。教育を蓄積して一時に迸發せしめたるの人にあらずして、自ら教育する爲に著作し、著作する爲めに自ら教育し、其精神に間斷なき糧を與へ、其技能を間斷なく成長せしめたる人なりしなり。人の能力には或程度の限界あるに係らず、彼が能力は底止する所あらずに開展したりき。故に其名著作は之が開展の頂上に達したる効果のみ。彼は愈老ひて愈名作を出したりき。

試に彼が著作の百餘篇を取て一々之を閲し去らん乎、歴々として其進歩の蹊路を尋ぬべし。

彼が年二十五六なりし青春の日に始まりたる其詩人的生涯は、秋風夜雨元禄文學の詞葉を凋零せしめたる其七十二年の冬に至り、其間四十有餘年百有餘種の著作之を其技倆より視理想より視結構より視

るに、分れて前後の二半生涯となるを認め、又更に第一期第二期第三期第四期の四時代に分たるゝを認むるなり。而して第一期第二期を含める前半生涯を修業時代とし、第三期第四期を含める後半生涯を成功時代とす。

即ち修業時代の第一期たる普通修業時代若くは其詩人生涯の少年期とも稱すべきは、彼が初めて筆を執りし時より大略其年四十歳に至る迄の間にして、彼が戯曲の躰裁は此日に於て定められ、日本戯曲の模型も實に此時決定せられたるなり。

而して其戯曲の不定なる躰裁より一定せる躰裁に入りたる此の時代は、嚴密なる意義を以て論すれば更に幾多の分類を見るべきものなりしなり。則ち一種の未熟なる叙事詩的躰裁により神劇滑稽劇の舊模型を其儘に採用したりしもの第一なり。全然主觀的にして或る形

態の抒情詩の如くなりしもの第二なり。躰裁に於ては已に大成したると共に人間をも其題目とせんとせし一の叙事詩の如くなりしもの第三なり。第一小期は躰裁の未定なりしと共に、主として史上に於ける或る事跡の頓末を明さんとしたるもの、神怪滑稽は其目的なりき。第二小期は史上の出來事を假りて一種の理想を説明せしものなりき。第三小期に至ては史上の出來事を叙するに一種の理想を假りたりしものにて、其事實と理想とを運用する上より見れば正に第二小期を轉倒し、其叙事詩的形躰なる上より見れば第一小期は單に歴史的事跡の頓末を叙したりしも、第三小期は幷せて人間の或る心術或る行爲の事跡をも寫したりき。其眞成戯曲と一歩なるは心術行爲其物を寫さずして心術行爲の事跡を寫したるを異りとするのみ。

斯くて彼が第一の作は其年廿五六にして都萬太夫の爲に作りたる演

劇脚本の或る臺帳めけるものに始りき。是れ他の木偶劇に用ひたる所謂淨瑠璃とは稍其趣を異にしたり。此時彼が嫉妬を描きて藤壺の后の怨靈藤の花より大蛇に變するの所、大に時俗に喝采せられ、端りなく彼が詩壇に立んと欲するの奮興力を挑發したりき。去れども其作の徒に兒童の喜を博するに足るべき御伽物語的の結構なりしことは勿論なり。

而して此作の彼が詞才を世に紹介するとに由て當日淨瑠璃の唱歌者として有名なる宇治加賀掾は來て彼が新作を請ひぬ。乃ち先づ「徒然草」てふ一曲を作りて之を贈り、尋て數篇の新作を與へり。又井上播磨掾の爲にも作れり。是れ彼が木偶劇に被らしむべき戯曲たる淨瑠璃の作者となりし初にして、此日を彼が修業時代の第一小期となす。此時代のものは之を異日の作に比すれば拙劣淺薄にして見るに足らざるのみならず、殆んど意義をなさゝる句さへもありたり。

試に此時代の作にして最も世の喝采を博し、たしかに此時代の作の標本とも見るべき「世繼曾我」及び其他の一二を取て之を觀るに、其『扨も其後』てふ何事をも意味せざる唱破辭を以て說き起したるは、金平本土佐本等の舊摸型其儘にあらずや。其齣短に節促に、『けり』『たり』等の斷止語、『斯くて』『去程に』『扨』等の轉換語、『扨も其後物の哀れを止めしは』の如き喚起語、『斯樣〳〵の次第なり』の如き省略語、『尤も斯こそ有べけれ』『感ぜぬものこそなかりけれ』の如き感歎語を最も多く挿み以て其光景を轉換し、光景を記せずして事實の成行を叙し、記事文と云んよりは叙事文と云ふべく、戯曲と云んよりは物語と云ふべかりしもの、亦金平本土佐本等の舊摸型其儘にあらずや。其時間の一致若くは場所の一致に介意せざるの甚しき『母は夢とも辨へ

ず、十郎が忘形見のありけるとや、はや疾々と身悶し、唯兄弟が蘇生たる心地して、頓て使を立てらるゝ。乳母抱き來りけり。』といひ、又『兩人諜合せつゝ化粧坂へと急ぎけり。彼處になれば、先案内乞ふて、頓て座敷へ入りにけり。』といへる如き、豈金平本土佐本等に於て多く見る所にあらずや。或は其『少とも更に事ともせず』『言葉を放て申しける』『萬事の床に伏し給ふ』の如き拙悪なる俗語を其儘に採用したりしもの、豈亦金平本土佐本等に於て多く見る所にあらずや。而して其叙する所の復讐談にあらざれば武功物語にして、怪力亂神の事にあらざれば嫉妬繼子いぢり若くは滑稽なる如きも、同じく金平本土佐本等の取て以て最好詩料となしたるものにあらずや。

井上播磨掾の爲に作りたる「天鼓」の如き、謡曲「天鼓」より着想結構して繼子惡みの事實を仕組み、狐を靈獣としたる俗説を假りて、滑稽を主とし、讀み來り讀み去て恰も御伽物語を聞くが如き感あり。又著しく演劇脚本躰と謡曲躰とを混合して頗る不熟なる痕跡あり。雅語俗語を混合して頗る不熟なる痕跡あり。而して其理想に至ては極めて卑且つ陋なれども已に一種の杼情詩的傾向を有したりしこと、其曲中の人物に智略之介武畧之介の如き命名あるを見ても明かなり。唯拙劣なる趣向の中にも、結構縱横にして思想推開力の尋常ならざりしことの自ら察すべかりしのみ。唯未熟不調和なる行文の間にも、筆鋒自在にして頗る發暢すべき素ありしことの之を知るに難からざりしのみ。

斯くて彼が普通修業時代は「一心五戒魂」「遊君三世相」の如き、佛理を説明すべく作られたる杼情詩的戯曲の成りたる第二小期に入れり。」其那智の飛瀑下氷柱碎けて萬仞の劍を降らす瀧壺の中、一山鳴動し

て荒行者文覺が胸中より團々たる五色の魂飛び、青きものは殺生戒の理を顯し、白きものは偷盗戒を示し、黑きものは邪淫戒、黄なるものは妄語戒、赤きもの飲酒戒を示したりと云ふが如き、眞に是れ無中有を生じ、空中に樓閣を築くもの。今傳ふる所の「一心五戒魂」は其後多少の潤色を經て「復鳥羽戀塚」と呼ばれたりしものなりとはいへ、彼が思想の豐富にして其想像の變幻靈活なるは、此日の結搆に於て已に之を見るべかりしなり。

而して貞享三年彼が年三十四の作なりし「出世景清」に至ては、彼が普通修業時代の第三小期を代表する作として、日本戲曲の始めて其の躰裁を一定したるものなりき。其落筆第一には猶『扨も其後』の一語を存したりしと雖、行文結搆共に曩日の作の比にあらずして今は題目を人間に取りたり。假令ひ其人間は理想の權化にして活動の致

なきものなりしにもせよ、阿古屋が妬みの焔を燃やして大事を破り、景清が一旦歸服しながらも賴朝の後姿を見て忽ちに其刀を抽きたる如き、時に人情の琴線に觸れんと欲しゝものさへなきにあらず。唯之を一個の人として觀察すれば、其寫したる所のもの、心術行爲の形迹に過ぎずして心の靈動にあらず、未だ以て其生命あるを認め能はざりしのみ。

此時に至り、彼は全く物語の形態を脱して戲曲の躰裁に入りたるなり。徒に人を笑はしむるを目的とせずして戲曲が同情の府なることを知りたるなり。而して戲曲の同情が馬鹿らしき滑稽の間に在らずして正しき悲哀の中に在ることをも知りたるなり。唯未だ如何にして之を同情の府たらしむべき乎、如何にして正しき悲哀を起さしむべき乎を知らざりしのみ。故に彼は未だ趣向の爲に人物を作るを免

戯曲表情術の自得

人生詩たるに着意す

れざりき。未だ大巧大拙相錯り有意斧鑿の痕跡存し皮相的にして痛切ならざる所あり、浮虚薄弱の所あり、又結構妥當ならざる所あるを免れざりき。然れども彼は此時已に嶄然其頭角を露はして當日の一大戯曲家となりぬ

此時代に於ける彼が修業の結果として見るべきは、戯曲躰裁の一定の外に、戯曲表情術の自得即ち淨瑠璃詩詞の考定是なりき。

彼嘗て其の自得の成績を語て曰く、『昔は、淨瑠璃は今の祭文同然にて尤も實なきもの成しを、某出て加賀掾より筑後掾へ移りて作文せしより、文句に心を用ふること昔にかはりて一等高く、假令ば公家武家より以下皆それ〳〵の格式をわかち、威儀の別よりして詞遣ひまで其うつりを專一とす。此故に同じ武家なりといへ共或は大名或は家老其外祿の高下に付て其の程々の格をもつけて差別をなす。是

活文術に着意す

も讀む人の夫々の情に善くうつらんことを肝要とする故なり。』と。是れ其戯曲が人生詩なることを解せるに由て着意したる之が表情術にあらずや。

云ふ、『都て淨瑠璃は人形にかくるを第一とすれば、外の草帋と違ひて文句皆活動を肝要とす。殊に歌舞伎の生身の人の藝と軒を並べてなす業なるに、精神なき人形に樣々の情を持たせて見物の感を取らんとすることなれば、大概にては妙といふに至り難し。某若き時大内の草帋(源氏物語、花散里の巻)を見侍るに其中に、「節會の折節雪いたう降り積りけるに、衛士にあふせて橘の雪を拂はせければ、傍なる松の枝もたはゝなるが恨めしげにはね返りて」と書けり。心なき草木を開眼したる筆勢あり。其故は橘の雪を拂はせらるゝをば松が羨みて己れと枝をはね返し雪を落したる景色、宛ら活きて働く心地

省筆法に着想す

ならずや。是を手本として我淨瑠璃の精神を入るゝことを悟れり。』と。是れ其彼が長技たる字々活動の行文術を解したりし言にあらずや。

又云ふ、『文句に手爾葉多ければ何となく賤しきものなり。然るに無巧なる作者は文句を必ず和歌或は俳諧などの如く心得て五字七字等字くばりを合さんとする故、自づと無用の手爾葉多くなるなり。例之ば年はゆかぬ娘と云ふべきを年はも行かぬ娘をばと云ふ如くなること、字割りに拘はるより起りて、自然と詞づら賤しく聞ゆ。去れば大やうは文句の長短を揃へて書くべき事なれども、淨瑠璃はも音曲なれば、語る所の長短は節にあり。然るに作者より字くばりをきつしりと詰め過ぐれば却て口にかゝらぬ事有物なり。此の故に我作には此拘りなき故手爾葉自から少し。』と。是れ其彼が獨得の今古に比倫なき省筆法を說けるものにあらずや。

第二期高等修業時代

今彼が此の普通修業時代を以て其生活の變遷に配せんに、第一小期は餘間を以て戲に筆を把りたる日の作なるべく、第二小期は全く仕を辭して他に爲すことあらずなりたる日の作なるべく、第三小期は意を著作に專らにし自家の立脚地を此處に定めんとしたる日の作なるべし。而して此の第三小期は正に初めて義太夫の爲に筆を染めたる時に當れり。

然るに彼が生活の異動は同時に彼が詩人的生涯の變動をも伴へりき。彼は年三十八にして京都より移て大坂に至り竹本座に入るに及び、是より演劇場裡の詩人として彼が詩人的生涯は其第二期に入り、普通修業時代より一轉歩して其壯年期とも稱すべき高等修業時代に入りたり。第一期に於て戲曲の形態を研究したりしもの、今は其精神

を研究すべくなりぬ。

蓋し其劇場中の詩人となりしは彼が詩人的生涯の進歩に非常なる便益を與へるものゝ如し。彼はこれに依りて其進歩の因る所の道途を發見したり。彼はこれに由りて其作る所と觀客の感嘆する所とを對照して、如何なる場合に於て最も多く同情の起さるべき乎を討求したり。即ち彼が研究は有形より無形に入りたりしなり。是に於て彼は表情術の練習と共に人情の秘密を探ることに最も其力を費したりき。

此時代の彼が作は第一期第三小期の後を承けて其講究を高尚にすること一歩なりしのみ。戯曲の題目は人間ならざるべからざるを知り、宵に人間の形態のみならず、行爲のみならずして、人間心中の事情をも解釋すべきものなるを知りたり。唯一種の宿命説を奉して人間

社會戯曲

義理

の命運を或る豫定せる軌道の中に置けるのみ。故に心中に於ける意思と意思との爭鬪を寫さずして、人が自然と挑戰したる狀情を寫し、以て外界より來れる人間の命運を示したり。「釋迦誕生會」「蟬丸」の如きは言ふまでもあらず、彼が同情術研究の結果として、又社會を壓し來れる現代的大傾向の影響として、題目を現代に求め、遂に初めて社會戯曲に筆を下したりし「長町女腹切」さへ猶明に此時代の感想を代表したりき。

而して彼が同情挑發術討求の成果は、こゝに人情の槓杆が義理に基ける悲痛に在ることを發見するに至りたり。義理とは個人の最大企圖と社會を繩すべき自然の規則たる道德との一致を謀る希望を云ふなり。

彼が其説明に曰く、『淨瑠璃は憂きが肝要なりとて、憐なれりなんど

いふ文句を多く書くは宜しからざる事なり。それがしが憂きは皆義理を專とす。蟲のまくぎが義理につまりてあはれなれば、文句のきつとしたる程愈憐れなるものなり。是故に憐れを憐れといふ時は、含蓄の意なくして其情薄し。憐れなりといはずして自然憐れなるが肝要なり。例之ば松島などの風景にても、嗚呼好き景哉と譽むる時は、其景象皆言ひ盡されて何の詮なし。其景を譽めんと思はゞ其景の摸樣を餘所ながら數々言ひ立つれば、好き景と言はずして其景の面白さ自ら知らるゝなり。』と。

人生の究所は彼に解せられぬ。詩的發情術は彼に解せられぬ。此の一大了悟に由て彼が修業期は其詩人的生涯の壯年時代と共に卒りぬ。因て顧ふにシエーキスピアが大成したるも其劇場中の詩人たりし力與て大なりしなるべし。「淀鯉出世瀧徳」は實に彼が卒業論文なりき。』

後半生涯、第三期得業時代

彼が年五十の前後は其詩人的生涯の前半生涯より後半生涯に入るの過渡にして、其修業時代と成功時代との分界線は此間に劃せられたり。

是に於て彼が詩人的生涯は其第三期たる成年期に入り、史戯曲作者たる一半の彼を取除きて、彼は始めて眞個の戯曲家となりたり。前半生涯は過ぎて後半生涯は來り、修業時代は過去となりて得業時代は現在となりぬ。「淀鯉出世瀧徳」に於ては猶强て愛度き大團圓を示したる如き形跡ありしも、今は全く理想的痕跡を沒するに至り、客觀象て主觀の美文を以て活ける人間を寫し、人心内に於ける企圖と道徳との衝突に由れる意見の交鬪を描き、以て人間各自の性情に基ける其外界との衝突に關する命運を明せり。曩日は社會に於て人間が自然と奮鬪したる勇ましき事實を寫し、今は心中に於て意思が道

理と戰ひたる凄まじき人間を寫せり。

彼が五十の時より畧〻其十年間を繼續したる此時代は、最も多く社會的戲曲を作り、殊に多く悲壯戲曲を作りき。「曾根崎心中」が其年五十一の夏に社會的悲壯戲曲の第一として作られてより、「薩摩歌」「心中重井筒」「堀川波の鼓」「卯月の紅葉」「卯月の色上」「丹波與作」「心中刄は氷の剱日」「夕霧阿波の鳴戸」「冥途飛脚」等皆此日に成り、就中「冥途飛脚」「丹波與作」「歌念佛」「心中重井筒」の如き稱して千古の作とな すべきものたり。

史的戲曲に於ては此期の初めに「雪女五枚羽子板」あり、後に「吉野都女楠」ありき。

而して此時代に於ける彼が文章は豐艶壯美、絢爛を極め、繽紛として春風落花を捲くの致あり。又驟然として夕立の青山を掠むる越ありき。題を探る極めて廣く、筆を揮ふ極めて縱横。意旺に情盈ち、文思宛も飛舞するが如し。

當日の文學眼ありし靈元上皇は彼が此時代の作たる「最明寺殿百人上臈」を讀み、其石曼卿が『蝶遺粉翼輕難拾、鶴墜霜毛散未歸。』の句を翻譯して『蝶の翼のおしろいを草にこぼして、梢には鶴の霜毛をぬきかくる。雪は花より花多き』といへるを嘆美し、『斯る才智を以て和歌を詠じなば、秀逸定めて多かるべし』と言へりき。千古の文豪を以て自ら居り、傲然として一世を睥睨したりし物茂卿は、彼が「曾根崎心中」のお初徳兵衛が死出の道行を敘して『此世の名殘夜も名殘、死にに行く身を譬ふれば、あだしが原の道の霜、一足づゝに消へて行く、夢の夢こそ哀れなれ。あれ數ふれば曉の七つの時が六つ鳴りて、殘る一つが今生の鐘の響の聞きをさめ、寂滅爲樂と響くなり。』といへる

を見て、『門左が妙處此中にあり。外は是にて推測るべし。』と叫びたりき。

精しく言へは、此時代の初は寧ろ文章を以て勝りたりしなり。後には文情相稱ふに至りたりしなり。彼は遂に其社會的戲曲に於て沒自家の作者となりぬ。

唯彼は明に詩料と詩料にあらざるものとを區別し、明に詩と散文との境界を認めたりき。故に彼は沒自家の作者となりし迄に寫實したれども、竟に現實を現實のまゝに寫すを以て其能事畢るものとはなさゞりき。即ち必ず現實の粹を寫實するを期したり。美は全たき現實の中に存せず又全き理想の中に存せずして、現實に由て理想を起すべきものゝ中に存するとを知りたればなるべし。即ち其最も多くの想像を惹くべき現實の中に存することを知りたればなるべし。言

ひ換れば現實の都てが戲曲の材となるべきにあらずして、現實の抽象相たる詩的結象が即ち戲曲的現實なるとを知りたればなるべし。

人の嘗て彼に謂て、『今時の人は能々理法の實らしき事にあらざれば合點せぬ世の中、昔語も當世受取ぬ事多し。去ればこそ歌舞伎の役者なども兎角其所作が實事に似ることを上手とすれ、立役の家老職は眞の家老に似せ、大名は大名に似するを第一とす。昔の如く子供だましのやうなるは取らぬなり。』と言ひしに答へて、彼は道ひき。

『此論尤ものやうなれども藝といふものゝ眞實のいき方を知らぬ說なり。藝といふものは、實と虛との皮膜の間にあるものなり。成程今の世は實事に似るを好む故、家老は眞の身ぶり口上を寫すを善しとすとはいへ、去れば迚眞の家老が立役の如く顏に紅脂白粉を塗る事ありや。又眞の家老などが顏を飾らぬ迚、頭のはげなりに舞臺に

出でゝ藝をなさば慰になるべきや。皮膜の間といふは是れなり。虛にして虛にあらず。實にして實にあらず。此間に慰みがあるものなり。是につきて、去る御所方の女中一人の戀男ありて、互に情を厚く通はしけるが、女中は奥深き座敷に住み、男は奥方へ入る事叶はず、朝廷なんどにて御簾の隙透より見るさへたまさかの事なれば、餘りにあこがれて、其男の像を木に刻ませ、面躰なんども常の人形にかはりて其男に毫程も違はず、色艶の彩色は言ふに及ばず毛の孔までもうつさせ、耳鼻の穴口の内齒の數まで寸分違はず作り立てさせたり。誠に其男を傍に置きて之を作りたる事故、其男と此人形とは精神のあるとなきとの違ひのみなりしが、女中之に近きて見るに、生身を直に寫してはほろきたなく、怖氣立ち、さしもの戀もさめ果てゝ、傍に置くもうるさく、やがて捨てたりとかや。是を思へば生

身の通りを直に寫さば、楊貴妃とても愛憎つきぬべし。それ故に繪そらごと迚、其像を畫くにも木に刻むにも、正眞の形を似するうちにも又大まかなる所あるなり。演劇も此くの如く、眞の事に似るうち又大まかなる所あるが結句藝になりて、人の心の慰みとなるなり。文句のせりふなども此心入にて見るべき事多し。』と。

斯くて彼の雙鬢が其六十年の上に白髮一筋を添ふる毎に、彼の戲曲家たる手腕は愈高く愈練熟を加へ來りぬ。今や彼が筆の跡は眞にミューズの神の足跡かと疑ふまでに天成になれり。恰も一種の靈力ありて彼が手に注ぐものゝ如くなりき。之を彼が詩人生涯の第四期とし、老年期とし、成熟時代とす。

此時代の特徴は前期に比すれば著しく圓熟して渾然となりたるにありき。絢爛は雄健となり。清深は沈痛嚴肅となり。結構次第に大に、

又次第に精。文愈熟して情愈深し。而して史的戯曲は其初め雄大にして堂々たるを主とし、漸くに沈勇なる悲歌戯曲に傾き行けり。即ち之が史的戯曲の標本としては、前に其六十三齢の作たる「國姓爺合戰」あり、六十六齢の作たる「曾我會稽山」あり。後に彼が此世に於ける最後の年の新春に於て場に上りし「關八州繋馬」ありき。社會戯曲は初めに「博多小女郎浪枕」あり。後に「心中天網島」「女殺油地獄」あり。其「油地獄」「天網島」の如き、前期に於ける「冥途飛脚」等と共に實に彼が終天の傑作なり。

天空の鳥來りて其枝に宿る程の樹となりぬ

是の故に之を約言すれば、彼が詩人的生涯は間斷なき自撝的進歩の生涯なりしなり。詩神の特命によりて彼が思想の畑に播かれし美の芽種は、竟に天空の鳥來りて其枝に宿る程の樹となりぬ。

〔註〕彼が詩人的生涯を縮圖すれば下の如し。參照すべし。

詩人生涯の縮圖

近松門左衛門詩人的生涯縮圖

前半生涯、　修業時代（大略年廿五六より五十まで）。

第一期（少年期）、　普通修業時代（大略年廿五六より四十まで）。　戯曲の形態を定む。

此の時代の著作見本、初「世繼曾我」。中「心五戒魂」。末「出世景清」。

第二期（壯年期）、　高等修業時代（大略年四十より五十まで）。　戯曲の精神を究む。

此の時代の著作見本、史戯曲、「釋迦誕生會」「蟬丸」。社會戯曲「長町女腹切」。

後半生涯、　成功時代（大略年五十より七十二まで）。　文情人至。

第三期（成年期）、　得業時代（大略年五十より六十まで）。

此の時代の著作見本、史戯曲、初「雪女五枚羽子板」。後「吉野都女楢」。

社會戯曲、「心中重井筒」「歌念佛」「丹波與作」「冥途飛脚」。

第四期（老年期）、　成熟時代（大略年六十より七十二まで）。　文情天來。

此の時代の著作見本、史戯曲、初「國姓爺合戰」「曾我會稽山」。後「關八州繋馬」。

社會戯曲、初「博多小女郎波枕」。後「心中天網島」「女殺油地獄」。

近松半二は浪華の儒者穂積以貫の子なり。若き時頗る放蕩なりしも、固オあり。遂に近松門左衛門に效ふて戯曲作者となり、寛延四年年二十七にして始めて「役行者大峯櫻」を作る。これより著す所數十百種。

出雲門左の後を承けて專ら意を趣向に用ひ、半二に至て結構の新奇を極む、而して戯曲の精神は漸く失へり。然れども其形態に至ては、寧ろ次第に演劇的に傾きたるものゝ如し。

彼が一代の妙文句と稱せられたるものは「太平記忠臣講釋」のおりは浮橋の出端、

加茂川と井地の小川も月やどる流れはおなじ二人づれ……

是れ彼が九日間の推敲によりて成りしものなりと云ふ。

彼は天明三年二月浪遊して山科の客舍に沒す、年五十九。遺稿あり、「獨判斷」と云ふ。

其作る所の戯曲は、他と合作せしものをも合せ擧ぐれば下の如し。「役行者大峯櫻」「世話盲淡路草談」「伊達錦五十四郡」「愛護稚名歌勝興」「菖蒲前操弦」「小袖組貫組門平」「小野道風青柳硯」「崇德院御代傳記」「平維茂凱陣紅葉」「姫小松子日遊」「隨聽寄妓鑑」「昔男春日小町」「敵打宗禪寺馬場」「姫小島武勇問答」「日高川入鐘花王」「太平記菊水の卷」「極彩色娘扇」「安倍清明後言葉」「由良港千軒長者」「古戰場鐘掛松」「清水清玄花系圖都鑑」「奥州安達ヶ原」「天竺德兵衛合鏡」「傾城阿古屋の松」「京羽二重娘形氣」「敵打稚物語」「關寄待新田系圖」「姫袖鏡」「小夜中山鐘由來」「太平記忠臣講釋」「四天王寺稚木像」「關取千兩幟」「三日太平記」「傾城阿波鳴戸」「讀賣三巳」「近江源氏先陣館」「萩大名傾城敵打」「妹背山婦女庭訓」「櫻御殿五十三驛」「朕方武士鑑」「性根競姉川頭巾」「假名寫安土問答」「新板歌祭文」「時代織室町錦繪」

其五　彼の著作

時代は時代を葬れども天才を葬らず。思想史上の巨大なる三尖塔。彼か富める所は思想の數なり、趣味の分量なり。都ての石決明が眞珠を含むにあらず。史的戲曲と社會的戲曲。彼が史的戲曲は理想戲曲なり。國民の理想を寫實したるなり。武士道。其事實に近からざるは國民理想の影なればなり。眞成の彼、眞成にあらざる彼、其一。中等以下の觀客の爲に作る。通俗譯。其事實に近からざるは通俗譯したればなり。眞成の彼、眞成にあらざる彼、其二。諱む所あり。其事實に近からざるは諱む所あればなり。眞成の彼、眞成にあらざる彼、其三。史的戲曲。史的戲曲は何故に大に稱揚せられし乎。社會嗜好の卑き爲に。彼の彼たる所以は社會戲曲にあり。

時代は時代を葬れども、天才の光を葬らず。傳記は歲月の回轉するに從て次第に幽暗の中に投ぜらるれども、天才の光は人智の發達す

時代は時代を葬れども、天才の光を葬らず

思想史上の巨大なる三尖塔

ると共に次第に其隱れたる光明を發揮し來る。

吾人は近松門左衛門に對して之が事實の一證左となりしを謝せずんばあらざるなり。彼は地圖の上には多くの古跡を殘さゞりき、然れども彼は日本思想史上に千古の批評家を躔かしむへき巨大なる三尖塔を止めり。彼は現實界の生涯には輝ける歷史と波瀾光怪なる出來事とを有せざりき、然れども彼は思想界の生涯に於て尋常茶飯の事の間に江海を吐呑し山河を涵さんと欲する奇景を有せり。切言すれば現實界の彼は一個の浪人のみ。遊手無能の徒と伍して放遊の中に其七十二年を消したる太平時代の逸民に過ぎざりき。然れども彼は思想の產物に富みたりしなり。思想界の彼は天に達せんとするの巨人なりしなり。彼が四十餘年の詩人生涯中に留めたる思想の印影は優に百世に亘りて不磨の光采を放つべきもの少なからず。

彼が富める所は思想の數なり趣味の分量なり

四十餘年の詩人生涯蓋し久しからざるにあらざるべし。百有餘種の著作蓋し多からざるにあらざるべし。然れども若し其分量のみを以て之を論ぜば何ぞ獨り彼を驚嘆せんや。瀧澤馬琴の如き一部の八犬傳すら業に已に幾んど彼が全著作にも敵せんとするの多數文字を有するにあらずや。故に彼が富める所は文字の數にあらずして思想の數なりしなり。頁の分量にあらずして趣味の分量なりしなり。

都ての石決明は眞珠を含めども都ての石決明が之を含むにあらざる如く、彼が著作は優に百世に傳へて不磨の光彩を發すべきもの少なからずと雖、彼が著作の都てか此くの如くなりとは決して謂ふべからざりき。

史的戲曲と社會的戲曲

彼が著作は史的戲曲と社會的戲曲との間に大なる徑庭あり。彼が社會的戲曲は幾んど天成なれども彼が史的戲曲は全たく人爲なり。彼が社會的戲曲には幾んど筆痕なけれども彼が史的戲曲には全く斧跡あり。彼が社會的戲曲は寫實的なれども彼が史的戲曲は理想的なり。又彼が社會的戲曲は概して佳作なれども彼が史的戲曲は概して佳作ならざるが多し。其狀恰も社會的戲曲家たる彼と史的戲曲家たる彼とは全く別種の人の如く然るなり。此くの如きものは抑何が故なるべきぞ。

彼が史的戲曲は理想戲曲なり

蓋し彼が史的戲曲は嚴正なる意味を以て之れを論ずれば本是れ理想戲曲のみ。人情を寫すを主として個人を寫すを主とせざりしなり。史的事實を假り史的人物を假りて或る種の心術權能を寫したりしなり。

然れども彼が史的戲曲は則ち理想戲曲なるが故に、彼は則ち理想派戲曲家なりとは謂ふべからざるのみならず、彼が手に成りたる理想

り

國民の理想を寫實したるなり

戲曲は彼が手に成りたるの故を以て、則ち之を彼が理想戲曲なりとは謂ふ〳〵からさりしなり。彼は理想戲曲を作りながらも猶全然たる寫實家たりき。其自家の姿を著作の陰に潛ましめたるは其社會的戲曲に於けると異ならず。而して其理想戲曲の理想戲曲たる所以は、唯能く國民の理想を寫實したるか爲めのみなり。

試に其理想戲曲たる史的戲曲及ひ其史的戲曲中の人物を看よ、其間に未た曾て彼が自家性癖の黑き印影とすべきものは見へずして、見ゆるものは却て此日に於ける國民性癖の影なるにあらずや。其戲曲が說明する成敗應果の理の如きも、彼が形而上論より來れる因緣果の理法を示したりと見るよりは寧ろ當代の形而上論より來れる因緣果を示したりと見るを適當とすべきにあらずや。

若し强て實例を示して之を證せよとならば、彼が「國姓爺合戰」に於

ける鄭成功の史上に於ける鄭成功にあらさるは言ふまでもなく、母を猛虎に騎せて千里の竹を孤往するの不稽なる、紅脂流しの荒唐なる、亦固より之を議するを要せさるに係らす、彼が此戲曲に於て歌ひたる國矜心は取りも直さず豐公征韓以來の國矜心にして、其敵愾心は猶今の敵愾心なるべく、成功が明を救ふて韃靼を破りたるは、亦猶今の朝鮮を助けて淸國に宣戰したると毫も異る所なき義心なりしを看よ。而して成功は最も義烈に最も任俠に最も仁慈に最も勇武に、兼て最も智謀ありて國民の最も善美としたる理想的人物なりしを看よ。「關八州繫馬」に於ける箕田次郎が當日の理想的忠臣なりしを看よ。源頼平が武士の然諾を畫きたるものなりしを看よ。若くは「信州川中島合戰」に於ける山本勘介の母が當日の理想的女丈夫なりしを看よ。又「本朝三國志」に於ける高富久吉公が、書院のからなしを

武士道

つ取て一振り振り出したる手の中に六十餘州を握りおさめし事の一世の感歎を集めたりしを看よ。

蓋し彼が社會的戲曲は直ちに日本人を代表したりしと共に、彼が史的戲曲は日本人の理想を代表したりしなり。殊に日本武人に對する理想を代表したりしなり。約言すれば彼が史戲曲に於て書き顯はしたる重なる理想は、日本魂と稱する日本的島人根性なりき。即ち所謂武士道なりき。

其事實に近からざるは國民理想の影なればなり

彼が史的戲曲の人物事實が往々實際に近からざりしもの、實にこれによるものにして、其社會戲曲は材を現社會に取りて直に造化の足跡を活寫したりしも、史的戲曲は國民の妄誕卑俗なる意想を寫實したるか爲め、其戲曲も自ら妄誕卑俗を混せざる能はざりしのみ。

眞成の

是れ社會的戲曲家たる彼は眞成の彼にして、史的戲曲家たる彼は眞成の戲曲にあらざりし所以の一なり。

彼、眞成にあらざる彼、其一

而して當日戲曲の用たる主として社會中等以下の悅樂に供するものにして、紳士淑女は之を言ふをさへ耻ぢたる所なるを以て、彼が筆を下すに當りても、亦此の中等以下の人に觀すべく、此の中等以下の人に何の苦もなく理會せしむべく、極めて卑近を旨として作りたりき。

中等以下の觀客の爲に作る

通俗譯

故に彼は古代の風俗をも此日の風俗の如くに敍したり。其觀客に最も易く理會せしめんが爲に實に斯く敍したり。去れば史的戲曲としての時代は初よりして彼に無用視せられたるなり。

故に彼は古代の英雄豪傑をも或る場合にまでは行文の便利に應じて都合よき性情を附したり。其觀客に最も易く理會せしめんが爲に實に斯くなしたり。去れば史的戲曲としての人物は初よりして彼に蔑

眺せられたりしなり。

故に彼は古代の地理若くは異邦の地理を記するに我邦の地理若くは此日の地理の如くに之を敘したり。其觀客に最も易く理會せしめんが爲に實に斯く敘したり。去れば史的戲曲としての場所は初よりして彼に重要視せられざりしなり。

是の故に社會戲曲に於ける場所人物時代は、事固より當日の事に係るを以て之を通俗に翻譯するの要なく、從て之を其在るが如くに寫すを得たりと雖、史的戲曲に至ては之を最も理會し易く通俗にせざるべからざるより、彼は復た多くの意を其時代と人物と場所とに用ふること能はざりしなり。而して史戲曲の史戲曲たる所以は、却て其時代と人物と場所とに最も重きを置くものなるにあらずや。

是れ社會的戲曲家としての彼は眞成の彼にして、史的戲曲家たるの

眞成の

其事實に近からざるは通俗譯したればなり

彼は眞成の彼にあらざりし所以の二なり。

加之時のならひとして事の上流社會に關するもの若くは大人君子英雄豪傑に關するものは、大に忌諱を避けさるべからざるものありて、成るべく事實に近からざらんことを要し、其氏名をも時代をも場所をも他に假らざるべからざりしなり。且つ成るべく事實の誇張を力め、空に憑て結搆する如きは、最も作者の技倆としたる所なりき。」

是の故に復た忌諱に觸るゝの恐れあらざりし社會的戲曲に於ては勉めて實際に近からしめんとしたるに係らず、史的戲曲に至りては却て勉めて事實に遠からしめんとしたりしなり。

是れ社會的戲曲家としての彼は眞成の彼にして、史的戲曲家たるの彼は眞成の彼にあらざりし所以の三なり。

然らば彼が史的戲曲と社會的戲曲との間に大なる徑庭ある所以のも

彼、眞成にあらざる彼、其二

諱む所あり

其事實に近からざるは諱む所あればなり

眞成の彼、眞成にあらざる彼、其三

史的戲曲

の、知るへし。

故に史的戲曲を觀んと欲せば、唯其結搆の奇觀を見よ。唯其探題の自在を見よ。又唯其行文の豊富を見よ。其想像縱横にして拘束すへからさる萬化千變の運用を見よ。以て彼が戲曲の眞相を見んと欲すると勿れ。況や其修業時代に於けるものゝ如き、概ね平凡の作にして、中には極て拙劣なるものをも含むをや。唯其成功時代の作の中二三の理想戲曲として見るへきものなきにあらず。殊に成熟期の作に至ては時代事に世話事を取組まんとして、稍眞成の史的戲曲に近づかんと欲する意ありたるものあり。

史的戲曲は何が故に大に稱揚せられし乎

而して古來の戲曲を說くものは却て重きを此の史的戲曲に置き、其「國姓爺合戰」「曾我會稽山」「雪女五枚羽子板」の如き、實に之を彼が三傑作と稱揚したりしなり。而して社會も亦實に之に同意したりしなり。其故何ぞや。

社會嗜好の卑きが爲めに

顧ふに社會は常に進取の趨向あるものなり。現實の適切なる批評よりは寧ろ將來の不稽なる經綸を喜ぶの傾きある時代あるなり。特に後世に於てこそ之を不稽なる經綸ともすれ。當代は却て之を間然する所なき理想となしたるものあるをや。社會戲曲の觀て心細き感あるよりは、史的戲曲の之に對して壯大豪放にして頗る人意を强ふするを喜ひしは、蓋し異むに足らざらん。

彼の彼たる所以は社會戲曲にあり

知るべし、當時に於て史的戲曲の社會的戲曲に勝りて世に贊稱せられたるは、史的戲曲が社會的戲曲に勝れる爲にあらずして、時代の嗜好が寧ろ意味ある眞實よりは比較的に意味なき誇張を喜びしに由れることを。故に彼の彼たる所以は實に其社會戲曲にあるなり。

〔註〕彼が作中當時に喝采せられしは「國姓爺合戰」「曾我會稽山」「雪女五枚羽子板」等其最たるものにして、時人之を三絶作と稱したり。中にも「國姓爺合戰」の如き、竹本座に於て正德五年十一月朔日を其第一日として、三年越十七個月間之を演しつゞけたるまでに喝采せられたりき。此戲曲流布して忽ちに海内に響れかりしのみならず、長崎の譯官同文二右衛門の如き其第三回櫻門の段を清語に譯して彼の國に傳ふるに至りたり。

其六　彼の文章《上》

文章を以て傳ふるに足る。創造的技能。新戲曲。結撰。「心中天網島」の結撰。第一光景、花街。小春。河内屋。小春と治兵衛との關係及び太兵衛。否な李韜天。愛の道德に衝突すべき地は作らる。光景一轉。治兵衛出づ。『何の因果で死ぬる契約した事ぞ』。關の孫一尺七寸。『嘔ぐな』。太兵衛來る。孫右衛門。『太兵衛より先にうぬを踏たい』。『狼狽た根生なぜ踏ぬ』。治兵衛曰く『誤うた〳〵』。小春樣參る帶屋内より。『私が立ます』。一段の結局。女主人公の苦悶を寫す。治兵衛が家。おさん。姑、兄。『そは太兵衛なり』。巨燈に又ころり。『あんまりトや治兵衛殿』。無念涙。小春死すべし。『何卒ぞ殺して下さるな』。單節の抽匣。『隱居なりともしませふ』。南無三寶貞五左衛門。『去狀書け』。引立て行く。男主人公の苦悶を寫す。光景再轉。蜆川の深夜。孫右衛門治兵衛を尋ぬ。手を捫て出づ。急湍の上に淀みあり。最後。形骸を破壞して已んぬ。餘韻裊々。以て彼が趣向力結撰力の如何を察すべし。又史戲曲を看よ。

文章を以て傳ふるに足る。

天下文章に巧なるもの尠なからず、然れども吾人は未だ彼が如くに巧なるものを多く見ざるなり。縱令彼は他の渾てに於て毫も傳ふべからずとするも、猶優に其文章を以て傳ふるに足るべし。況や獨り文章のみを以てするにあらざるをや。

創造的技能

彼は文學上に於て大なる創造的技能を有したるものなりき。彼は戲曲家として自ら能く最も進歩したる戲曲の精神を見出したるのみならず、彼は能く戲曲の躰裁をも創定したりき。又能く戲曲の文躰をも創定したりき。

新戲曲

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

舊來の戲曲は結構意義共に單簡露骨にして、一個小話の顚末を具したるものに過ぎざりしに、彼は自ら其新版圖を開拓して意義深遠結構壯大なる五齣の戲曲となし、日本戲曲は彼によりて始めて誇るに

結構

足るべき戲曲の面目を具したり。

而して其結構趣向の如何に至ては百餘種の戲曲各特殊の變化ありて一々之を說叙すること難しと雖、其最も多く最も尋常にして且つ最も完具したるものゝ其一を擧ぐれば、初に戲曲一篇の主人公たる個人の企圖と社會を律しつゝある或る道理即ち道德との間に終局の大衝突を來すべき幾多の因緣を示し、中ごろ其衝突に對する劇甚なる煩悶を叙し、而して勢の窮る所、層々疊々千波萬波寄せ且つ寄せて一時に碎けんと欲し、奔騰洶湧驅突し來りたる人生の洪水が、將に命運千丈の壑底に陷落せんとするに及びて、忽ちに一段の道行諷唱篇を挿み、悠揚搖曳反覆嗟歎し、以て其局促を避けて紆舒し、而して後に所謂大破裂若くは大一致の結局に至るを常としたりき。

「心中天網島」の結構

今其完具したる作の一とす〳〵き「心中天網島」を見るに——

妓が情の底深き戀の大海として、替へても干されぬ峴川の天地を其第一光景とし、今此新地に戀衣紀の國屋小春が、風呂より出てたる浴衣姿にて、今宵は誰か呼子鳥の覺束なくも行燈のかげに行違ふ妓に、

や、小春樣か何といの。互に一坐も打絶、貴面ならねば便も聞ず。氣色が悪いか顔も細り窶れさんした。誰やらが咄しで聞ば、紙治樣ゆへ内から數度の吟味に遇んして、何處へもむざと送らぬの。いや太兵衛樣に請出され、在所とやら伊丹とやらへ往かんす筈共聞及ぶ。

と呼掛けられ、

あゝもう伊丹〳〵と云ふて下んすな、それでは痛入はいな。最惜けに紙治樣と私しが中、左程にもない事を、あの諺口の太兵衛が浮名を立て云散し、客といふ客は退果、内からは紙屋治兵衛故じやとせく程に〳〵、文の便も叶はぬやうに成やした。不思議に今宵は武士衆とて河庄方へ送らるゝが、斯往く道でも若し太兵衛めに逢ふかと氣遣さ〳〵、敵持同前の身持。なんと其邊に見へぬかへ。

おゝ〳〵夫ならちやつと外さんせ。あれ一丁目からなまいだ坊主が悪戯念佛申て來る、其見物の中にのんこに髪結て野良らしい伊達衆自慢と云そな男、慥かに太兵衛樣かと見た。あれ〳〵爰へ。

と云ふ間程なく、炮禄頭巾の青道心が見物ぞめきに取卷れ來るや、彼女は人立紛れにちよ〳〵走りて河内屋に駈込みたるを以て起せり。」

『是は〳〵早いお出。お名さへ久しう云なんだ。やれ珍らしい小春樣〳〵はる〳〵て小春樣。』と主の花車が勇むを叙し、而して暗に彼女

関係及び太兵衛

と治兵衛との間已に久しく愛の成立しつゝありて、爲に客といふ客は退果つるに至りたるを説き、且つ太兵衛なる者ありて所謂横戀慕を以て彼等の愛を妨げんとするを語り、以て豫め彼等が間の愛は到底何事かを生ずるにあらざれば止む能はざるべき形勢を示したり。

否な李韜天

而して小春は花車が勇むを止めて『是門へ聞へる、高い聲して小春〳〵と云ふて下んすな。表に否な李韜天が居るわいの。密かに〳〵に頼みます。』といへるを見ば、以て其太兵衛に對する感情を見るべく、太兵衛は漏れ聞て三人連にてすつと入り、『小春どの李韜天とはない名をつけて被下た。先禮から云ましよ。連衆内々咄した心中よし意氣方よし床よしの小春どの、頓て此男が女房に持か、紙屋治兵衛が請出すか、張合の女房近付に成て置や。』と跡凰より、彼女か『聞ともない』とついて退けば又摺寄、『聞ともなく共小判の響で聞せ〻見せう。貴さまもよい因果じや。天滿大坂三郷に男も多いに、紙屋の治兵衛二人の子の親、女房は從弟同士、姑は伯母聟。六十日〳〵に問屋の仕切にさへ追るゝ商賣、十貫目近い金出して請出すの根曳のとは、蟷螂が斧で御座る。我等女房子なければ、姑なし親もなし伯父も持ず身すがらの太兵衛と名をとつた男。色廓で潛上云ふ事は治兵衛奴には叶はね共、金持た許は太兵衛が勝た。金の力で押たらばなふ連衆何に勝ふも知れまい。』と罵るを見れば、以て太兵郎が何物なるかを知るに足るべし。又彼の言を以て治兵衛の境遇を察すれば、彼と彼女との愛の竟に如何に悲慘なる光景を呈するに至るべきやは豫め知るを難しとせざるなり。

愛の道德に衝突すべき地は作らる

斯くの如くして彼等が愛の道德に衝突すべき地は作られたりき。

斯くて太兵衛は暴亂(あばれ)狂(くるひ)き、折柄門口に人目を夜の編笠に忍び來れる

光景一轉、治兵衛出づ

武士を誤りて治兵衛となし、引ずり入れて、驚き去り、武士客は、小春が紙屋〳〵と善悪の噂身に應へ、思ひ頽れ恍惚として無拶挨なるに無興しながらも、花車の取なしに夜は次第に深け行きぬ。

光景一轉。治兵衛はあはれ逢瀬の首尾あらばそれを二人が最期日と名殘の文に言ひかはしつゝ、毎夜〳〵の死覺悟に魂抜けて。うか〳〵として來り、煮賣屋にて彼女が方に武士客に侍して河庄方に在るを聞き、覗く格子の奥の間にては、『思ひの有女郎衆の御伽で氣がめいる。門も靜な、端の間へ出て行燈でも見て氣を晴そふ。』と連立ち出るを、『南無三寶』と格子の小蔭に身を隱せり。

武士は謂ふ、

なふ小春殿、宵からの素振詞の端に氣を付れば、花車が咄の紙治とやらと心中する心と見た、違ふまい。死神付た耳へは異見も道

『何の因果で死ぬる契約したる事』

理も入まじと思へ共、去とは愚痴のいたり。先の男の無分別は恨ず、一家一門其方を恨み憎しみ、萬人に死顔晒す身の耻。親は無かも知られ共もし有ば不孝の罰。佛は愚か地獄へも暖かに二人連では墮ちられぬ。痛はしとも笑止とも一見なから武士の役見殺には成がたし。定て金づく、五兩十兩は用に立ても助たし。神八幡侍冥利他言せまじ。心底殘さず打あけや。

小春は言ふ、

あゝ忝けない有がたい。馴染よしみもない私、御誓言での情のお詞、涙がこぼれて忝けない。ほんに色外に顯るでござんする。如何にも〳〵紙治さんと死ぬる約束。親方にせかれて逢せも絶、指合有て今急に請出す事も叶はず。南の元の親方と爰とにまだ五年有る年中、人手に取れては私は素より主は猶一分立ず。いつそ死

で呉ぬか、あゝ死にましよと、引に引れぬ義理詰に風と言替し、首尾を見合せ相圖を定め扨て出やう扨て出よと、いつ何時を最後共其日送りの敢ない命。私一人を頼の母様、南邊に賃仕事して裏家住。死んだ跡では袖乞非人の飢死もなされふかと、是れのみ悲しさ。私とても命は一つ、水臭女と思召も耻しながら、其耻を捨て死にともないが第一。死ずに事の濟むやうに何様ぞ〳〵頼みやす。卑怯な頼み事ながら、お武士様のお情、今年中來春二三月の頃迄私しに逢ふて下んして、彼の男の死に來る度毎に邪魔に成て期を延し〳〵、自から手を切ば、先も殺さず私も命助かる。何の因果に死ぬる契約した事ぞ。思へは口惜ふござんす。

之を立聞ける治兵衛は毋でか驚き且怒らざらんや。彼は氣も狂亂、障子に寫る二人の横貌、『ゑゝ打擲たい踏たい。何吐すやら點頭合拝

闕の孫六一尺七寸

む囁く哮るさま、胸を押へても堪へられぬ堪忍ならぬ』。心もせきに開の孫六一尺七寸扨放し、格子の挾より小春が脇腹爰ぞと見極めをいと突くに座は遠し。

『騒ぐな』

客は飛かゝりて兩手を攫んでぐつと引入、刀の下緒手ばしかく格子の柱にがんじ搦みて啖かと締付けり。『小春騒ぐな覗くまいぞ』。

太兵衛來る

忽行戻りの身すがら太兵衛、扨こそ河庄が格子に立つたは治兵衛めな、投て呉んと襟かい攫で引搶ぐ。『あいたゝ』。『あいたとは卑怯者。やあこりや縛付られた。扨は盗ほざいたな』。『や活掏賊め、胴掏賊め。』とては碓と打擲、『や頑盗め、や梟首め。』とては蹴飛かし。『紙屋治兵衛盗して縛れた。』と呼はり喚けば、行通ふ人邊近所も駈集まる。内より武士飛で出、『盗人呼りは汝か、治兵衛が何盗んだ、さあ吐せ。』と太兵衛を搖攫み、土にぎやつと令偃せ引捕へて、『さあ治兵衛踏て

『太兵衛より先にうぬを踏たい』

『狼狽た根生なぜ踏ぬ』

腹をいよ。』と足元に突付くるや、治兵衛縛られながら踏付る。太兵衛は土塗れにて逃出すを、人々遣るな〳〵と追駈行。

武士立寄て縛めとき、頭巾取たる面躰。『やあ孫右衛門殿、兄者人。あつあ面目なや』。

『扨は兄御様かいの』。

治兵衛走り出る小春が胸ぐら取て引据へ、『畜生め狐め太兵衛より先うぬを踏たい。』と足を擧ぐれば、孫右衛門、

やい〳〵〳〵其愚頑から事起る。人を賺すは遊女の商賣、今目に見へたか。此孫右衛門は只だ今一見にて女の心の底を見る。二年餘りの馴染の女心底見付ぬ狼狽者。小春を踏足で狼狽た自己が根生なぜ踏ぬ。そゝ是非もなや、弟といひながら、三十に押掛り、勘太郎おすゑと云ふ六歳と四歳の子の親。六間口の家踏しめ身代潰

るゝ辨別なく、兄の異見を請ることか。舅は伯母聟、姑は伯母じや人親同然、女房おさんは我爲にも從弟、結合々重々の緣者親子中。一家一門來會にもおのれが曾根崎通ひの悔みより外餘の事は何もない。最愛は伯母者人。連合五左衛門殿はにべもない昔人、女房の甥子に倒され娘を捨た、おさんを取返し、天滿中に耻かゝせんとの腹立。伯母一人の氣扱ひ、敵になり味方に成、病に成程心を苦め、おのれが耻を包まるゝ、恩知らず。此爵たつた一つでも行先に的が立。斯ては家も立まじ小春が心底見屆、其上の一思案、伯母の心も安めたく、此亭主に工面し、おのれが病の根元見屆くる。女房子にも見變しは尤、心中よしの女郎、あゝお手柄。結構な弟を持、人にも知られし粉や孫右衛門、祭の練衆か狂亂か、竟に差ぬ大小ぼつ込、藏屋舗の役人と小詰役者の眞似をして痴を

盡した此刀、捨所がないわいやい。小腹が立やら可笑やら胸が痛い。

と齒ぎしり、泣貌かくす皺面に、小春は始終噎返り、『皆なお道理。』と計にて、詞も涙にくれたりき。

大地を叩て治兵衛、『誤つた〳〵兄者人、三年前よりあの古狸に見入られ、親子一門妻子まで袖になし、身代の手鏈れも、小春と云ふ鑞倉賊に賺され、後悔千萬。ふつゝり心殘らねば尤足も踏込まじ。やい狸め狐め鑞倉賊め、思切た證據是見よ。』と、肌に掛たる守袋、月頭に一枚宛取換したる記請合て二十九枚、『戻せば戀も情もない、是や受取。』と襠と打付、『兄者人、彼奴が方の我等が起請數改め請取て貴方の方で火に燕て下され。さあ兄貴へ渡せ』『心得やした。』と彼女は涙ながらに守袋を投出しぬ。

小春樣參る帶屋内より『私が立ます』

孫右衛門押開き、二十九枚數改め、外に一通女の文『是や何じや。』と開く。『あゝそりや見せられぬ大事の文。』と取付を押退け、行燈に上書見れば『小春樣參る、紙屋内さんより』。

彼は左有ぬ顏にて懷中し、『是小春、最前は武士冥利、今は粉や孫右衛門商賣冥利、女房限つて此文見せず、我一人披見して起請共に火に入れる。誓文に違はない。』と告ぐ。小春は『あゝ添けない、夫で私が立ます。』と、又伏ししづめば、治兵衛『はあ〳〵うぬが立の立ぬとは人がましい。是れ兄者人片時も彼奴が面見ともなし、いざ御座れ。去ながら此無念口惜さ、何樣もたまらぬ。今生の思ひ出女が面一つ踏、御免あれ。』と、つゝと寄り、治圓太踏んで『ゑゝ〳〵、しなしたり。足かけ三年戀し床しも最愛可愛も、今日といふ今日只だ此足一本の暇乞。』と額ぎはをはつたと蹴る。わつと泣出すを見捨てゝ兄

一段の結局

弟は打連歸りけり。此の慘凄なる光景は、實に此の一段の終局なりき。

女主人公の苦悶を寫す

無心中か、心中か、眞の心は女房の其一筆の奥深き彼女が悲痛は幾許ぞや。以て愛と道德との衝突に對する女主人公の苦悶を寫しぬ。

作者は此くの如く外界に於ける人生の苦闘を寫すと共に、亦内界に於ける意思と意思との闘爭を寫すべく、企圖と道德との衝突に進むべき因緣を寫し、兼て之に對する女主人公の苦悶即ち其意思と意思との闘爭を寫せり。

治兵衛が家

而して彼は更に男主人公の苦悶を寫すべく、福德に天滿神の名を直に天神橋と行通ふ所も神のお前町に、營む紙店の紙屋治兵衛が家を出して、こゝに一個人生の小パノラマを開けり。

良人が巨燵に轉寐を枕屏風で風ふせぐ。外は十夜の人通り、見世と内とを一締に女房おさんの心配り。彼女は使に行きたる婢女を待ち、二兄を負ひ拉ひ去りたる阿房の三五郎を氣遣ひ、『西の方より粉屋の孫右衛門樣と伯母御樣伴出てお出なされます。』と聞くや、『是は〳〵、それなら治兵衛殿起そのふ。旦那殿起さしやんせ、母樣と伯父樣が伴立てござるげな。此の短い日に商人が壹中に寐た振を見せては、又機嫌が惡からふ。』と治兵衛を起す。

『おつとまかせ。』とむつくと起きし治兵衛は、算盤片手に帳引寄、二一天作の五くつちんがさんつん、六ちんがにつちん。

二人は來て彼等夫妻を誠めり。母は言ふ、

夕部十夜の念佛に講中の物語、曾根崎の茶屋紀伊國屋の小春といふ白人に天滿の深い大盡が外の客を追退、直に其大盡が今日明日

に受出すとの是沙汰、賣買高い世の中でも金と愚鈍は澤山など、いろ〳〵の評判。此方の親父五左衛門殿常に名を聞きぬいて、『紀伊國屋の小春に天滿の大盡とは治兵衛めに極つた。嗅の爲には甥なれど此方は他人、娘が大事。茶屋者を受出し女房を茶屋へ賣りおらふ。着類着そげに疵付られぬ間に取返してくれふ。』と沓脱半分下りられしを、『のふ騒々しい神妙にも成ことを、明さ闇さ聞屆けての上のこと。』と押宥め、此孫右衛門同道した。孫右衛門の咄しには、今日は昨日の治兵衛でない、曾根崎の手も切れ本人間の上々と聞けば跡からはみかへる、そもいかなる病ぞや。其方の父親は伯母が兄、最愛や光譽道清往生の枕を上、鏡なり甥なり治兵衛がこと頼むとの一言は忘ねど、其方の心一つにて頼まれし效もないわいの。

『そは太兵衛なり』

巨燵に又ころり

『あんまりじゃ治兵衛殿』

治兵衛手を拍てそは太兵衛なるを告るや、おさんも色を直して、『是許りは此方の人に微塵も吁詐はない。母様證據は立ます。』と語り、夫婦の詞割符も合、『さては左様か。』と手を打て伯母も心を安め、念の爲とて誓詞を取り、二人は喜ひ歸り去れり。

門送りさへそこ〳〵に敷居も越や越ぬ中、巨燵に治兵衛又ころり。おさんはまだ曾根崎を忘れずかと呆れながら立寄りつゝ、蒲團を取て引退れば、枕につたふ涙の滝あり。

引起引立、巨燵の櫓につき据て怨ずらく、

あんまりじゃ治兵衛殿。夫程名殘惜くば誓詞書ぬがよいわいの。一昨年の十月中の亥の子に巨燵明た祝義とて、まあ後で枕並べて此かた、女房の懐中には鬼が住か蛇が住か、二年といふもの巣守

にして、漸々母様と伯父様のお蔭で睦しい夫婦らしい寝物語もせふ物と、樂む間もなく、眞に酷いつれない。左程心殘らば泣しやんせ〳〵。其涙が蜆川へ流て、小春の汲んで呑やらふぞ。あゝ曲もない、恨めしや。

治兵衛、

無念涙は耳から成共出るならば云ずと心も見すべきに、同じ目より溢るゝ涙の色の變らねば、心の見へぬは尤々。人の皮着た畜生女が名殘も絲爪もなんともない。意恨有身すがらの太兵衛、金は自由妻子はなし、請出す工面しつれども、其時までは小春めが太兵衛が心に隨はず。『少しも氣遣なされな、假令こなさんと縁切れ添れぬ身に成たり共、太兵衛めには請出されぬ。若し金ぜきで親方から遣るならば、物の見事に死んで見しよ。』と、度々詞を放ちし

が、是見やいのいて十日もたゝぬうち太兵衛めに請出さるゝ腐れ女の四足めに、心はゆめ〳〵殘らねども、太兵衛めが隱言吐、治兵衛身代息盡ての、金に手詰つてなんどゝ、大坂中を觸廻り、問屋中の突合にも面をまぶられ生耻かく。胸が裂る。身が燃る。惡口惜い。無念な。熱い涙血の涙ねばい涙を打越へ、熱鐵の涙が溢るゝ。

おさんはつと興さめ顔。

やあそれならば最愛や小春は死にやるそや。

はてさてなんぼ利發でも流石町の女房じやの。あの無心中者なんの死なふ。炙をすへ藥呑で命の養生するはいの。

いや左樣でない。私が一生云ふまいとは思へ共、隱し包でむざ〳〵殺す其罪も怖ろしく、大事の事を打明る。小春殿に無心中并子程

もなけれ共、二人の手を切せしは此さんが機關。こなさんが浮々と死ぬる氣色も見へし故、あまり悲さ、『女は相見互ひ事、切れぬ所を思ひ切、良人の命を賴む〳〵。』と、かき口説た文に感じ、『身にも命にもかへぬ大事の殿なれど、引れぬ義理合思ひ切。』との返事。私や是守に身をはなさぬ。是程な賢女がこなさんとの契約違へ、おめ〳〵太兵衛に添ふものか。女子は我人一むきに思ひ返しのないもの。死にやるわいのし〳〵。あゝあゝ瓢な事。さあさあさ、何卒ぞ助て〳〵。

と騒ぐ。

取返した起請の中しらぬ女の文一通兄貴の手へ渡りしは、おぬしからいた文な。夫ならば此小春死ぬるぞ。

あゝ悲しや、此人殺しては女どしの義理立ぬ。まづこなさん早ふ

行て何卒殺て下さるな。

彼女は立て簞笥の小抽匣明け、新銀四百目を出し、更に大抽匣の鎖明けて、簞笥をひらりと飛八丈、縮緬の明日はない夫の命しら茶うら、娘のお末が兩面の紅絹の小袖に身を焦す。是を曲ては勘太郎が手も綿もない袖なしの羽織も交て郡内の仕末して着ぬ淺黄裡、黒羽二重の一張裡、定紋丸に萬の葉ののきものかれもせぬ中は丸裸でも外錦、男餝の小袖までさらへて物數十五色。内端に取て新銀三百五十匁よりや貸さぬといふ事はない物までも有顔に、夫の耻と我義理を一つに包む風呂敷の中に情を籠めげる。

私や小供は何着いでも男は世間が大事。請出して小春も助け太兵衛とやらに一分立て見せて下さんせ。

請出して其後、其方は何と成ことぞ。

『隱居なりさもしませふ』

南無三寶眞五左衛門

あつあ左樣じや。はて何とせふ、子供の乳母か飯焚か、隱居なりともしませふ。』

餘りに冥加恐敷、此治兵衛には親の罰天の罰は當らず共、女房の罰一つでも將來はよふない筈。兇してたもれ。

勿躰ない、夫を拜むことかいの。手足の爪を剝しても、皆其人の奉公。紙問屋の仕切銀、何時から着類を質に間をわたし、私か算筭は皆明殼、夫惜い共思ふにこそ。何云ふても跡へんでは返らぬ。

あさ〳〵早ふ小袖も着かへて莞爾り奥ふて往かしやんせ。

是に於て彼は衣を更め、銀を肌につけ、三五郎に風呂敷包を負せつゝ將に出んとしたりき。已に破碎せんと欲したる彼等が命運も今は漸く救はれんず有樣となりぬ。何事ぞ門口に毛頭巾取て入を見れば、南無三寶眞五左衛門來らんとは。

『去狀書け』

彼等が苦心は全く水泡に歸しぬ。烈火の如く怒りたる五左衛門は『去狀書け。』と叫べり。彼が手をつき頭を下げて、

御立腹の段尤も共、お詫申は以前の事。今日の只今より何事も慈悲と思召し、おさんに添せて下されかし。譬ば治兵衛乞食非人の身と成、諸人のはしの餘りにて身命を繋ぐ共、おさんは急度上に居、憂め見せず辛いめさせず添ねばならぬ大恩有。其譯は月日も立、私の勤方身上持直し御目に懸れば知るゝこと。夫迄は目を塞いでおさんに添せて給はれ。

と壓に喰付詫るに係らず、彼女が、

いや私や往かぬ。厭も厭れもせぬ中を何の恨に壹日中、夫婦の耻は晒ぬ。

と泣詫れ共聞入れず、五左衛門は振放す彼女の小腕をとらへて引立

引立て行

く

男主人公の苦悶を寫す

て行けり。叫ぶらく『此上に何の耻、町内一杯喚いて行く』と。

此の一齣は曩に女主人公の苦悶を寫したる後を承け、主として男主人公の苦悶を寫したりしもの。彼が心變りしと思ひたる小春は啻に心變はらざるのみならず、彼女が至大の愛によりて其最高義の苦痛を忍びつゝあること今や彼の知る所となれり。而して更に貞良温淑なる彼が妻は其献身的の貴き愛を捧げて彼が心の祭壇下に供へつゝあることをも發見したり。彼は兩者の愛の間に板挟みとなりぬ。彼が意思と意思との苦闘は熱い涙血の涙ねばい涙を打越へ熱鐵の涙を濺て猶足らざらんと欲するの痛聲を受けぬ。幸にして彼は其貴むへき妻の救護に由りて僅に其命運の地位を恢復せんとするの希望を發したりし刹那、猛然として襲來したる一陣の暴風は横さまに彼を擠して九天の上より九地の下に到達すべき窈冥不測の大壑底に顚倒に

光景再轉、覗川の深夜

孫右衛門

打込みけり。

光景再轉。十五夜の月冴て覗川を流るゝ水も行通ふ人も音せぬ丑滿空の天地となりぬ。

迎ひのものは大和屋傳兵衛をおとなひ、程なく潛りをによつと出で、『小春樣お泊りじや、駕籠の衆直に休ましやれ。あゝ云ひ殘した是花車さん、小春樣に氣を付て下さんせ。太兵衛樣へ身請がすんで金請取たりや預り物。酒過させて下さんすな。』と叫んで歸れり。

茶屋の茶釜も夜一時休む頃、『治兵衛樣のお歸りじや小春樣起しませ、夫呼びませ。』と亭主が聲。治兵衛は去り又還り來て脇差を取りて去れり。

寂々、夜寂々。

治兵衛は密に來て大和屋の戸に縋りぬ。内を覗かんとするの瞬間に

治兵衛を尋ぬ

人影あり。驚き隱るれば弟故に氣を碎く粉屋孫右衛門先に立ち、跡に丁兒の三五郎が脊中に甥の勘太郎を伴れ、大和屋を敲て治兵衛を問ひ、又小春か在るを聞て獨語ちつゝ去る。『さあこい裡町を尋て見ん。勘太郎に風ひかすな。ごくにも立ぬ父めを持て可愛や冷たいめをするな。此の冷たさで仕舞ば好が、ひよつとすると愛めは見まいか』。

手を搦て出づ
急湍の上に淀みあり

治兵衛は影隔るや馳出てゝ跡懐しげに伸上り、手を合せて伏拜めり。而して歸て小春を誘ふて去る。

急轉直下、乾坤を盛め來りし大悲壯大慘悽の光景は最後の爆裂に接近して故らに雍與迫らざるの風色を呈しぬ。所謂道行の一段は徐ろに書き出されて、彼等が一片恍惚の境界繦綿の心事は反覆永言せられたり。

最後

形骸を破壞して已んぬ

餘韻裊々

彼等は地上に於ける最後の手を取て相坐しぬ。彼女は猶言へり、『二人が死に顔並べて、小春と紙屋治兵衛と心中沙汰あらば、おさん樣より頼にて、「殺して呉れるな」「殺すまい、挨拶切」と取替せし其文を反古にし、「大事の男を唆しての心中は流石一坐流れの勤の者、義理知らず僞り者」と、世の人千人萬人よりおさん樣一人の下見、恨み嫉みも嘸と思ひ遣り、未來の迷は是一つ』と。治兵衛は元結際より我黑髪を斷てり。小春も亦酷や惜げも投島田を切れり。『迚もものことにさつぱりと死場をかへて山と川。此樋の上を山と淮ら、和女が最後場。我は又此流れにて縊るゝ。最後は同し時ながら、捨身の品も所もかへておさんに立扱く心の道』。二人は途に自ら其形骸を破壞して始て已んぬ。

蓋し其一往峭折し來りたるが爲め、却て悠揚の語をなして之を送り、

以て彼が趣向力結構力の如何を察すべし

又史戯曲を看よ

以て其餘韻を裏々盡きざらしめたるなり。

＊　＊　＊　＊

此は是れ彼が傑作中の一のみ。

「冥途飛脚」の如き、「丹波與作」の如き、「女殺油地獄」の如き、亦皆其最も完具に近しとする所のもの。而して結構も趣向も自ら多少の差異なきにあらざるのみならず、其最尾のものに至ては、殊に著しき特色を其旨趣の上にも趣向結構の上にも之を見るなり。唯彼が趣向力結構力の如何は未た必ずしも此を以て之を察し能はざるにあらざるべし。故に敘せず。

若し夫れ單に變化の自在にして結構趣向の縱横なるを見んと欲せば、請ふ其史戯曲を看よ。

行文字句の妙

新文脉

彼が文章

其七　彼の文章《下》

行文の妙。新文脉。彼が文章の特色其一、雅俗折衷の詩的新文脉。彼が文章の特色其二、省略法。彼が文章の特色其三、景情并叙法。彼が文章の特色其四、調品の多種。彼が文章の特色其五、滑稽。彼が文章の特色其六、活叙法。

彼が文章の妙は、其結構趣向の上に於て妙なるのみならず、其行文字句の上に於ては更に妙なりき。

蓋し彼は其結構の上に新なる躰裁を定めたると同時に、亦其行文の上にも新なる制格を創したりしなり。彼が戯曲の行文は其結構と共に久しく後人の摸範となりし所なり。而して竟に何人も彼に及ばざりし所なり。

彼が文章の特色として首として人の注目を惹くべきは、其自ら創定

したる最も縱横自在なる雅俗折衷の文躰是なるべし。

日本の文躰は王朝の昔に漢文と國文と各異れる道に由りて發達し來りたりしもの、鎌倉時代の前後に至りて圓熟なる調和をなし、以て優麗悲壯なる平家物語太平記の新日本文となり、彼に至て更に和漢雅俗を折衷したる詩的新日本文となりたりき。

而して彼が詩的新日本文は最も縱横にして、如何なる雅語をも如何なる俗語をも同一處に置て毫も不釣合なる所なきのみならず、極めて卑野なる方言も一たび彼が筆に入れば則ち瑰麗なる詩語となりて出で來りたりしなり。以て如何なる急調をもなすべく、以て如何なる緩調をもなすべく、以て如何なる感情をも叙すべく、以て如何なる論議をも述ぶべきものなりき。故に彼は自ら『假令は公家武家より以下皆夫々の格式をわかち、威儀の別によりて詞遣ひまで其のうつ

りを專一とす』と云へるに副ひて、其歌はんと欲する所を縱横無碍に表情したりき。

彼が文章に於て最も人の注目を惹くべき他の一は彼が獨特の省筆法なり。其忠兵衛梅川が逃げ迷ふ樣を叙して、

忠三郎息を切て駈來り。『是は〳〵忠兵衛樣、親父樣の咄で段々を聞て來た。御身の事で此在所は大坂から犬が入り、代官殿から詮議ある劍の中へ晝日中、運の盡たお人じや。御身の振を見付けたやら、俄に在所家並の片端から家搜し。親仁樣を今搜す。是から私が家の番。親仁樣はいとしや早ふ扳してくれよとて、狂亂になつてじや。鰐の口とは只今。さあ〳〵裡道からどぜ街道山へかゝつて退しやれ。』と云へは、夫婦は狼狽へる。女房は譯知らず、『私も一所に退きましよか』。『阿房らしい。』と引退けて、夫婦に古簑古

笠や雨もあしべも亂るゝ心。死しても此情け、深く忍びて出にけり。

と云ひ、小春治兵衛が忍び出る苦心を狀して、

大和屋の潛りの透間さし覗けば、内にちらつく人かげは、『小春じやないか』。待としらせの合圖の咳をへん〳〵、かつち〳〵、をへんに拍子木打ませて、上の町から番太郎が、くる〳〵たぐる風の夜は、せき〳〵廻る火用心。でよざ〳〵も、人忍ぶ我には辛き葛城の神隱れして遣り過し、透を窺ひ立寄れば、潛り内から密と明く。『小春か』。『待てか、治兵衛樣。早ふ出たい。』と氣を急ば、せく程廻る車戸の明るを人や聞付んと、しやくつてあくればしやくつて攀き、耳に聽く胸の中、治兵衛が外から手を添ても、心震ひに手先も震ひ、三分四分五分一寸の先の地獄の苦みより、鬼の見ぬ

彼が文章の特色其三、景情并叙法

間と漸々に明けて嬉しき年の春。小春は内を抜出て互に手と手を取かはし、北へ行ふか南へか西か東か行末も心の早瀨蜆川流るゝ月に逆らひて、足をばかりに。

と云へる如き、何等の絶妙ぞ。何等の省筆ぞ。狀景躍々として目之を見るが若し。文法を歌滅するまでに省筆したれども、其意義は十二分に全たきにあらずや。

更に他の彼が文章の特色は、情を叙し景を叙するに唯一筆を以てすること是なり。即ち情中景を寓し、景中情を寄せ、甚しきは一事に數事を意味せしめ、諷詠の間に幾多の想像を聯出せしめ、以て其興味を盡きさらしむるの類を云ふ。是れ本と日本語の非常なる自由性を具するに由るとはいへ、其極致の光彩を發したるは實に彼が運用の妙に由らずんばあらざりき。

人情太だ明なれば感慨すること罕なり。太た暗ければ亦感慨すること罕なり。而して唯春の夜の朧月の如く、返照に彩られたる夕空の雲の如く、半は明に半は暗く半は有限に半は無限に半は見え半は見えず半は實在にして半は想像を容るべきもの、即ち是れ其最も多く人を感慨せしむるものなりとせば、理を究むるにあらずして感慨すべきものたる詩歌の文章に、太た平凡明白なるを忌み太た佶倔晦澁なるを忌むと共に、最も善く人の想像を牽くべき文躰を適當とするは自ら其理なきにあらざるべし。然らば彼が此の情景幷叙的の文躰は、豈詩歌の文躰に最も適當せる文躰にあらずや。

試に看よ、曾て物徂徠が感嘆措かざりし彼の『此世の名殘、夜も名殘。死に行く身を譬ふれば、他しが原の道の霜、一足づゝに消へて行く、夢の夢こそ哀なれ。あれ數ふれば曉の七つの時が六つ鳴りて、殘る一つが今生の鐘の響きの聞きをさめ、寂滅爲樂と響くなり。』の數句の如き、此の短文字中に途上霜白き冬枯の野の曉色あり〳〵として想像に浮ぶにあらずや。又此の荒涼なる凄まじき光景中には死の腕に倚りたる少男女の方に墓邊に急きつゝあるの姿自ら眼下に躍るにあらずや。又看よ、彼が地獄の上の一足飛をなしつゝある梅川及忠兵衛を敍したる、『無慘やな忠兵衛、我さへ浮世忍ぶ身に、梅川が風俗の人の目立を包み兼ね、かり駕籠に日を送り。奈良の旅籠屋、三輪の茶屋、五日三日夜を明し、廿日餘りに四十四兩遣ひ果して二分殘る、かねも霞むや初瀬山、餘所に見捨て〳〵。』の數文字の如き、妻戀鳥の羽音にも怖る落人の情、途上の景、宛然として目見るが如くなるにあらずや。景情雙叙の妙至れりと謂つべし。

而して又他の人の注目を惹くべき其文章の特色の一は、彼が文藻の

の特色其四、詞品の多種

極めて豐富なることなり。而して其用筆の自在なる、多種の詞品を縱横に用ひ、幾んと美文のあらゆる粹美を集めたるものに似たり。英雄を寫せは雄渾にして勇士が鐵馬に鞭て關門を出る趣あり。美人を寫せば婉麗にして裊々衣に堪へざるの致あり。商賈を寫せは巧俐に。倉父を寫せは素朴に。死を寫せば慘酷。情を寫せは纏綿。山を寫せは峩々たり。海を寫せは洋々たり。輕きものは水晶盤上に珠を轉する若く、艶なるものは百花の亂れ飛ふが若し。

彼が文章の特色其五、滑稽

更に他の特色は其最も輕妙なる滑稽なり。彼何ものゝ多魂漢ぞ、曲中の或ものは方に悲絶痛絶叫天泣地の淵に沈むに係らず、彼は忽ちに冷然として滑稽を出すことあるなり。觀客の情燃ゆるに當りて彼は忽ちに筆を止むることあるなり。吾人は彼が著作を讀で其情の冷かにして時に慷慨憤死すべき刹那にも噓るゝことあるを慣る。讀者を悲悶せしめて彼は笑へり。讀者は彼が筆に掀弄せられて悲喜顛與是れ遑なきなり。

彼は實に粉屋孫右衛門が其弟の死を救はんと欲して尋ね廻るに當り、其夜る〳〵去る所を問ひ、阿房の三五郎をして『一の側の納屋の下。』と答へしめて之を笑ひたりき。彼はお澤夫妻の痛悲し、子を持つものゝ身にこたへてお吉も同情の涙を掩ふに當り、『折からに泣く蚊の聲も、いとゞ涙を添へけり。』と狀して、其哀れさに又可笑し味を添へたりき。彼は又限りなき苦心に驅られて金借らんと欲しつゝ海賊の前に顯はれたる小女郎を見て、『顏を見合す荒男、俄にたしなむ衣紋付、鬼が花見る風情なり。』と呼ふを猶豫せざりき。彼は伊達の與作が悲痛の餘に出たる八藏との喧嘩を評して『ぶつつぶたれつ捆み合ふ、誠に馬子の喧嘩とて馬のふみ合ふ如くなり。』と云ひたりき。

お種が『父様に見られては死ねばならぬ。』と下女が臥したる夜着の内に狼狽へ入るや、飛上り、丸裸體にて『嗚悲しや、うらが寢た懐ろへ盗人が這入て雪の肌を荒すは。』と喚き廻りしを語りき。男思ひの女房と主思ひの男たる新七夫妻が、誠餘りて掴み合ふや、『女夫爭ひ犬くはぬ、犬の啓氣に威されて、辻の番太が夢くらふばくろふ町をぞ歸りける。』と見立てたりき。

更に他の特色たる字々句々の活動に至ては、恰も夜の光景は萬象をして悉く夜ならしむるが如く、春の光景は萬象をして悉く春ならしむるが如く、滿眼の風物一として情を帶んで活動せざるはなく、人をして其冥想中に恍焉たる一塲の別乾坤を開かしむ。

「油地獄」を觀る者は。其暗憺を見るべし。「天網島」を觀る者は、其悽慘を見るべし。梅川を觀る者は其婉約多趣なるの情天地を見るべし。

おさゐを觀る者は其濡れぬ先こそ露をも厭への風情を見るべし。

彼が河内屋與兵衛のお吉を殺す一段を叙する辭に曰く、

父母の歸るを見て心一つに打うなづき、脇差抜て懐ろにさいたるくるゝさらりと開け、つつと入るより胸もくるゝも落付、『七左衛門殿は何方へ、定めて掛も寄りましよ。』と、餘所の方から種問ひける。『誰かとこそ思ふたれ、與兵衛樣か。こな樣は仕合な、後共云ず好い所へござんした。是此錢八百此綜こな樣へやれと天道から降りました。戯かしやんせ。なんぼ涙人でも極の日の實、まんがちお ろ。』と差出せば、與兵衛ちつ共驚かず、『是が親の合力か』。『はて早合點な、追出した親達が、なんのこな樣へ錢金を遣しやんしよ』。『いや隠さしやるな、先にから門口に蚊に喰れ、長々しい親達の愁歎聞て涙をこぼしました』。『むゝ、そんなら皆聞てか。能合點參り

しか。他人でさへ目を泣きはらした。此錢一文も仇には成まい。肌身に付て一働。お二人の葬禮に、立派な乘物に乘せうといふ氣がなければ、男でもくゐでもない。夫を御背なされたら天道の罰佛の罰日本の神々の罰が當つて將來が能有まい。先歳いて。』と差出せば、『如何にも〳〵能合點しました。只今より眞人間に成て、孝行盡す合點なれ共、勘甚お慈悲の錢が足らぬ。といふて親兄には云はれぬ首尾。爰には賣溜掛の寄金も有筈、新でたつた二百匁計、勘當のゆりる迄、貸て下され』。『それ〳〵〳〵、おくを聞ふより口聞、どこに心が直つた。虚言にも金貸て呉とはいはれぬ義理。世間の義理を欠いても、金借て悪性所の拂いして、跡から段々行ふでな。成程金は奥の戸棚に、上銀五百目餘、錢も有は有なから、夫の留主に、一錢でも貸ことはいかな〳〵。いつぞやの野崎參り、

着物洗ふてしんぜたさへ、不思議だと疑はれ、云譯に幾日かゝつたやら。なふ、うとましやゝ〳〵。歸られぬ内其錢持て早いんで下さんせ。』といふ程傍へにじり寄。『不義に成て貸て下されば』。『はてならぬと云ふにくどい〳〵』。『くどふ云ふまい貸て下され』。『いや女と思ふて弄しやると、聲立て叫くぞや』。『はて與兵衛も男。二人の親の詞が心根に浸こんで悲ひ物、弄るの侮るのといふ所へ行くことか。何を匿しましう、跡の月の二十日に親仁のぼう判して、上銀二百匁今晩切に借ました。や、まあ跡を聞て下され。手劵の表は上銀一貫目、借た金は二百匁。明日になれば手劵の通一貫匁で返す約束。それよりも悲は、親兄の所はいふに及ばず、兩町の年寄五人組へ先樣からことはる筈。今に成て此金の才覺泣ても笑ふても叶はぬこと。自害して死ふかと覺悟し、是懐に此脇差

さしは差て出たれども、只今兩親のなげき御ふびんがりを聞ては死で此金親仁の難義に掛ることと不孝のぬり上、身上の破滅。思へは死ぬるにも死なれず、生ては居れず、詮方なさに見掛ての御無心ぞや。無れば是非もなし。有金たつた二百匁で與兵衛が命を繼で下され。御恩德冥途の底迄忘れうか。お吉樣どうぞ貸て下され。』と、いふ目の色も誠らしく、そうした事もと思ひながら、兼ての僞り、是も又其手よと、思ひかへして、『ふう、、まが〳〵しいあの盧言はいの。まだをひれ付ていはしやんせ。ならぬと云ふては、きつうならぬ』。『是男のめうりに掛、誓言立ても成ませぬか』。『はて何とせう、借ますまい』。と、いふより心の一分別。『そんなら此樽に油二升取替て下さりませ』。『それは互の商ひ內、貸借せいでは世がたゝぬ。成程つめて。』と、賣場にかゝり、消る命の燈火は、油はかるも夢の間と知らで升取柄杓取。後に與兵衛が邪見の刀、扳て待ども見ず知らず。『祝ふて節句も御仕廻なされ。こちの人共、割入て相談有、金なれば役立まい物でもなし。五十年六十年夫婦の中も、儘にならぬは女のならひ、必らず我を怨んでばし下さるな。』といふ內に、燈火に映る刄の光。お吉びつくり。『今のは何ぞ、與兵衛樣』。『いや何でも御座らぬ。』と、脇差うしろに揮かくす。『それ〳〵乾度目もすはつて恐ろしい顏色。其右の手爰へ出しやんせ』。『おつ。』と脇差持かへて、『是見さしやれ、何も無い〳〵。』と云へ共、お吉身もわな〳〵。『あ、こな樣は小氣味の惡い。必らず傍へ寄ますい。』と、跡しさりして寄門の口、明て逃んと氣を配れば、『はて、きよろ〳〵何おそろしい。』と、付廻し〳〵。『出合へ。』とわめく一聲。二聲待ず飛懸り、取て引絞寄。『ほゑ立つるな女め。』と、

喉笛の鎖をぐつと刺す。刺されて惱亂手足をもがき、『そんなら暇立まい。今死んでは年はもいかぬ三人の子が流涙する。其が可愛ひ、死ぬも無い。金も入程持て御座れ。助けて下され與兵衛樣』。『を、、死に共ない筈。尤も〳〵。こなたの娘が可愛程、己も己を可愛がる親仁がいとしい。金拂ふて男立ねばならぬ。あきらめて死んで下され。口で申せば人が聞、心でお念佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。』と引寄て、右手より左手のふと腹へ、刺てはぐり〳〵、扳ては切。お吉を迎の冥道の夜風、はためく門の幟の音。あおちに賣塲の火も消へて、庭も心も闇みに、打まく油、流る〳〵血、踏のめらかし踏すべり。身内は血潮のあかづ〳〵、赤鬼、邪見の角を振立て、お吉が身をきる劍の山。もくぜん油の地獄の苦痛。軒の菖蒲のさしもげに、ちゝの病はよくれ共、人は此でう病遁れをぬ、菖蒲

刀に置露のたまも亂れていき絶けり。日比の强き死顏見てほつと我から心もおくれ、膝節がた〳〵がたつく胸を押さげ〳〵。さげたる鍵を追取て、覗けば蚊帳の打とけて寢たる子供の顏付さへ、我を脫むと身も震へば、つれてがらつく鍵の音、頭の上に鳴神の落かゝるかと肝にこたへ、戸柵にひつたり引出すうちがひ、上銀五百八十兩、雪に開たる心當。ねぢ込ぬちとむ懷の重さよ。足もおもくれて、薄氷履む、火踏む。此脇差は栴檀の木橋から川へ沈む來世は見へぬ沙汰、此世の果報の付時と、内をぬけ出、一さんに足に任せて。

亦以て彼が文藻の如何に非凡なりしかを察すべし。

〔註〕「傾城酒呑童子」は姐樓の主人茨木屋幸齋が著を極めて聞せられたりし事を作りたるものなり。彼が執筆の座に竹田出雲穆敬以貫あり。彼

は幸齋が隨筆を狀して『金の冠巻ぬばかり』と云ふに至り、夜已にふけたればとて歸りしに、二人同し蚊厨に臥して語るやう、以貫

扨々門左が例の妙文驚きしなり。併し金の冠巻ぬばかりとは、町人の事跡には狂言綺語ながら甚しきに過たり。堅書き直させ候べし。

出雲

以貫子のいねるはいかさまけやけき言葉なり。定めて門左了簡あるべし。

堅彼は來りて書き續きぬ『撥は持病にありさかや』と。二人相顧て惘然たるもの之を久ふせりと云ふ。亦彼が文學上に於ける縱横奇變の才思を見るべし。

彼が散文に至ては世見ること極めて稀なり。大坂金屋橋銅吹所船野彦九郎なるもの傳へたりといふ彼が美人畜の狂聲あり。

樂天が酒中の美人は夢のむつと。僧正遍照が詠中の戀は給にかける女。とりかたにはたれか、これが。什麼去。

ものいはぬわらはぬ代にりん氣なく、

衣裝表具にもの好みせず。

平安堂近松七十一歳狂聲。

又「國性爺大明丸」といへる書の序あり。

昔し榮花の公の大非川の遊遨には、管絃の船和歌の舟文學のふれを分ち、其藝にたへたる人なゐらみのせられし。今此新艘に何をか積し。曰。竹本が一流絃管あり、和歌あり、詩文あり、農樂あり、商賈あり、武士事のいさめる、れんぼの相やはらげる、人事のさかしおろかなる、佛神の樞化、花鳥の色音風聲水音。凡天の覆へる、地の載たる、もろ〳〵方なき國性爺の、唐船つくりをもとふれにして、拍子のとり棹、ふしのをも棹をこまやかにうつして、淳々浦々にまはし、果しなき國々深山の奥の里々までいたらしめんとてぞ、榮樹の櫂、象牙の槳、三筋の纜にかけて船乘よしの大吉日、順風に時を得たり。のせてやれ大明丸。

享保元年申の冬春ちかき日、

近松序之。

其八　彼何人ぞ

天才。才性一時一事の湊注。狂氣と天才。忘我の境。自然の妙相と冥合す。狂氣以上の天才。溫清潤厚他の奇なし。一種の樂天的生活。敏活なる感覺と、熾熱無我なる同情。一時一事。快絃舞ふが如し。詩人の至境。偶然にして此に至りたるにあらず。大なる成功と大なる準備。

天才

人の才性を賦せらるゝや然かく甚しき懸隔あるにはあらざるべし。唯其才性を一處に湊注し得ると否とは、則ち事業の上に生ずる効果の小大成否の由る所にして、所謂天才なるものは則ち其才性の全量を一時一事に湊注し得るをこれ謂ふに過ぎざらん。

才性一時一事の湊注

狂氣と天才

雜々として我が前に滿るものは森羅萬象にあらずや。擾々として我心を亂るものは人界の事情にあらずや。此の擾々雜々の中に於て、能く其才性を湊注し、以て其間に錯はれる或る美的結象を感獲抽得するものは詩人の天才にあらずや。狂氣と詩才とが其間纔に一髮を容るゝの異に過ぎざる所以は、一時周圍一切の感覺を斷斷して心力の渾てを其目的とするものゝ上に注射すること、彼此同一樣の心狀を呈するに由れば、ならん。

忘我の境

此の心力の渾てを其目的物の上に注射したる瞬間は、則ち是れ其忘我の境に入りたる瞬間にして、其心に取て其手に注ぐに、滾々として迸りつゝ盡きざるべし。恰も一種の靈力ありて之を指揮迸出せしむるものゝ如く、其滿潮し來りたる心海の靈波は自家の覺性以外に張動して宇宙の神秘を紙上に染め出すなり。而して其染摸樣や半は天啓にして、自然の妙相と冥合す。

自然の妙相と冥合す

若しそれ世の狂者が渾ての常情と相絶ちて或る一事に向へる瞬間に、其最も鋭敏にして最も激越せる感情を以て、最も意外なる怪力を顯

す如きも、其瞬間に於ける心身の狀況は甚しく天才と異る所あるにあらざるべし。

狂氣以上の天才

宵に理論に於て然るのみにあらざるなり。『大才にして狂氣を帶びざるもの殆と稀なり。』との語にあて欽めらるゝ事實は、古來一二にして足らざるなり。中にも世に大なる詩人にして狂味を帶びたるの例は古來最も多しとする所。そは今こゝに列擧するまでもあらず。

然れども吾人は狂氣と天才とが相距る一歩なるを認識せんと欲すると同時に、亦狂氣を帶べるものにあらざれば決して天才を有するの權理なしとは信じ肯せざるなり。吾人はシェーキスピアが果して狂味を帶びたるや否やは之を知らずと雖、近松門左衛門が狂味を帶びたるものにあらざりし事は、之を推知するに難からざるのみ。

温清潤厚

『見性却清醇。享齡擬壯椿。春温浮滿腔。空眼轉洪鈞。』句翰清歌妙。

他の奇なし

少陵綺語神。申休門榜爍。樂隱特相親。』とは、是れ彼の親友穗積以貫が曾て彼の肖像に題したる所の詩なりき。辭句に意味なりと雖、彼が温清潤厚何の奇もなきの人にして、別に狂味を帶びたるものにあらざりしとは之を類推するに難からず。且つ假令其壯歲に於ては曾て一たび城垣落魄の境涯を經來りしとありしにもせよ、晩年の彼は悠々天を樂んで此日を送りたることと亦知るべきなり。以貫が所謂『申休門榜爍。樂隱特相親。』ものの。何ぞ唯に狂せざるのみならんや。

一種の樂天的生活

浪華の都、紅塵萬丈の裡、家に貞良なる妻あり。外に共に昇平を樂しむ三五の友あり。人世の觀察を縱にして、自適清樂し、極めて凡俗なる出來事中に或は宇宙の秘密を窺ひ、日常坐臥の間に或は人生最高の意義を察し、以て其好む所の著作を事とす。是れ彼が晩年の生涯なり。其悲痛骨を刺すが如き悲戲曲も、焉ぞ此の一種の樂天的

敏活なる感覺と熱無我なる同情

境涯より作り來りたるに非ざるを知らんや。

顧ふに彼は狂氣に近き天才よりは、より健全なる天才なりしなるべし。顧ふに彼は狂人的詩人よりは、より大なる詩人なりしなるべし。」然れども彼は其温潤なる狀貌中に最も敏活なる感覺と最も熾熱にして極めて無我なる同情とを有したりき。

然り、彼は最も敏活なる感覺を有したりき、故に彼は筆を下す間に於ても或る眞理を見出すことを難しとせざりき。然り、彼は最も熾熱にして極めて無我なる同情を有したりき、故に彼は何人を寫すにも皆全幅の同情を傾けて之を寫したりき。否彼は同情を傾けて寫したりと謂んよりは之と融會して寫したりと謂ふを適當としたりき。彼は如何なる善人にも如何なる惡人にも融會したりしなり。彼が寫したる人物の靈動するは之が爲のみ。彼が寫したる人物の一

一時一事

快筆舞ふが如し

として何れの處にか同情を表すべき好所なき者なきも之れが爲めのみ。

とはいへ、彼が心力は一種の抽匣に似たる者なりき。一の抽匣にして抽出さるゝ間は他の抽匣は休止したりしなり。他の抽匣にして抽出さるゝ間は此抽匣は休止したりしなり。而して事止めは悉く休止して何物もあらざりしなり。彼が感覺然り。彼が同情然り。顧ふに是れ彼が才思の縱横自在にして毫も凝する所なき變化の存したる所以なるべし。顧ふに是れ彼が心力の或る程度に限止せられずして能く間斷なき進捗をなしたりし所以なるべし。

傳ふる所に據れば、彼が「曾我會稽山」を艸する、享保三年の五月廿八日明七つに筆を取りて廿九日明六つに脫稿し、「心中天網島」は、享保五年の冬彼遊んで住吉新家の酒樓にありしに、大坂より劇場の急使、

ゆふべ網島大長寺に男女の情死ありたり。何卒速に大坂に歸り、淨瑠璃に作りてたまはらば、明日一日稽古にして明後日より興行せん。

の報を齎らすに及ひ、彼乃ち駕籠を飛ばして大坂に歸り、駕籠を下るや直ちに筆を取りて、駕籠にて走り歸りしまゝ書き付たればとて、『走り書き』と書き出し、『謠の本は近衛流、野郎帆子は紫の』と續け、以て之を其道行となし、大坂の橋多きを取りて「思の橋盡し」と題し、此くの如くして之を成したりと云ふ。亦以て彼が快筆の如何に舞ふが如くに紙上を走りたる乎を察するに餘あるべし。是れ豈全幅の精神を一齊に傾瀉するものにあらずして能く此くの如くならんや。然らば其一朝筆を握るや、猶德川家康が戰に臨んで勇み立てるが如きものありて、忽ちに天才奕々として紙上に煥發流露し來れるものにあらざる歟。

而して其筆を執れる間の彼は則ち忘我の妙境に立てる彼にして、彼は此時實に神と直接なりしなり。彼が想像の天地は夜の幕の落るが如くに推開れて、幽奥なる美的結象は彼が心眼下に曜々として浮動し、神秘なる眞理の妙光は彼が想天地内に燦々として四射したりしなり。彼は都ての場合に於て能く此くの如くなるを得ざりしも、其幾度か斯る妙境に立ちたることあるは疑ふべからざる如し。縱令彼は分析的に人生の極致を理會し得ざりしにもせよ綜合的に之を默解したりしならん。是れ則ち詩人の至境なり。

然れとも彼は決して偶然にして此に至りたるものにはあらざりき。專心精意全精神を傾注したるの極こゝに始めて有意識の極たる無意識の域に達したるのみ。彼は學問の人なり。自家の命運を自家の手

大なる成功と大なる準備

によりて領收したる人なり。

故に其生涯は自家の進捗なれども、而も驅られたるの進捗にあらずして、自ら好んでの進捗なりき。所謂文王なしと雖猶興る者、時勢の中に育せられて其頭を時勢の外に擡けたるなり。而して彼が父母は固より彼に其富贍なる思想を湛ふへき腦を與へ、彼が時代は固より彼に彼を戲曲家に成功せしむべく温光を送りたりしながらも、彼が自家の力に由り自家を成就したるの困難は、徐ろに其進捗の順序を察し、徐ろに其如何に永き修業時代を有したりし乎を見れば自ら明かなるべし。或人曰く『大なる成功は大なる準備を要す。』と、猶信なる哉。

〔註〕穂積以貫通稱は伊助、播磨の人にして儒を伊藤東涯に學び、大坂に居りて醫を業とし、諺解を事とせり。性不羈。近松半二が父なり。享保十一年に歿す。

著作

著す所○「經學要字纂」三卷○「助語字俗解」二卷○「唐土王代一覽」六卷○「悉曇摩多脉文綱要」一卷○「四書國字解」○「五經國字解」○「世說國字解」三卷○「文法直裁武訣鈔」一卷○「助語科註考錄」○「助語考器記」○「淨瑠璃評註難波土產」五卷。

思想界に於ける彼　第二

悠々たる天地の心。解せんと欲する如くに解するを妨げず。吾人の前人に對する亦之に似たるものなき能はず。

天地果して心なき乎、日落ちて月出で春逝きて秋來ること未だ曾て怠らず。天地果して心ある乎、雲行き水流れて定處あるなし。悠々たる天地、其心ありや心なきや竟に知るへからざるなり。

然れとも吾人の之に對する、時に其心なきを心なしとして其心なきを歌ふを妨げず。時に其心あるを心ありとして其心あるを讀むを妨げず。

吾人の前人に對する、亦稍之と相似たるものなき能はざるべし。其遺作を探て其思想を覓むるに、惡ぞ時に其の自覺せざるの意義を讀むことなきを保せんや。吾人が今思想界に於ける門左衛門を釋する、亦恐らくは彼が自覺せざるの彼にして或は認められて吾人に之を彼なりとなされたる所もあるべし。去れとも吾人は苟も彼が思想の痕跡にして歸納し來て之を或る思想の結果なりと認め得へきものならんには、其自覺に上りたると否とを問はずして之を思想界の彼となすを躊躇せざらんとす。愚者は自ら其愚者なるを覺らざるも其愚者なるに於て何の妨なければなり。傑士は自ら其傑士なるを覺らざるも其傑士たるに於て何の妨なければなり。

其一　彼の人生に對する觀念

彼は人生を如何に解釋したりし乎。思藻雲の若く詞花雪の若き彼が劇天地も、徐ろに其去路を覓めば豈一蹊の見出すへきものなからん

個人、性情

社會、道德

社會想と個人想の一致

喜戲曲

悲戲曲

や。

蓋し彼は天地の間に個人あることを認めたり。即ち個人の性情あることを認めたり。彼は天地の間に個人あると共に亦社會あることを認めたり。即ち社會を律するの道德あることを認めたり。而して人生の最高義は此の個人性の極致と社會性の極致とを一致せしむるに在ることを認めたり。即ち其個人想たる人の最大企圖と社會想たる世の最上道德との一致は則ち人の最も貪むへき宇宙の理法に從順するものなることをも認めたり。

斯くて彼は其個人想と社會想との一致したるもの、之を人生最大の喜悅とし、取て以て喜戲曲の料となし、其個人想と社會想との一致を希企するの極却て互に相抵觸し、遂に爲に個人の現存在を破碎するに至りたるもの、之を人生の聖大なる悲痛とし、取て以て悲壯戲曲の料となしたり。且つ其宜しく相一致すべくして却て相抵觸するに至りたる所以を原ねて、之を其境遇を緣とし性情を因として生じたる過誤に歸したり。彼が所謂義理なるものは則ち此の個人想と社會想との一致を企圖するの心狀のみ。所謂性情劇と料らずして其意義を同ふしたるものにあらずや。

性情劇の意義に暗合す

試に一例を擧れば、將に大破裂の慘局に達せんとして忽ち其緣たる境遇の變化により、遂に其の個人想と社會想との一致を得たりしもの、則ち「丹波與作」の喜戲曲の如き是なり。而して爲に其個人の現存在を破碎し、以て其個人想を社會想に合せしめたるもの、則ち紙屋治兵衛の悲壯戲曲の如き是なり。

人生の極致

假令彼等の個人想とする所は世の最高人類の個人想とする所に比すれは幾等を下れるものなりしにもせよ、亦多數人類の個人想とする

所たり。而して其個人想を以て社會想に殉すべく自ら甘んじて大破裂の慘境に沈みたる所以に至ては、實に歪曲の極致とする所にして、亦人生の極致とする所ならずんばあらず。

凡夫凡婦の胸中も其個人想と社會想との決鬪や直ちに阿修羅王と梵天帝釋との戰なり。意思と意思との苦爭は即地に無間地獄を顯じ、其悶絶の聲は叫喚地獄をなし、喚悲の炎は燒熱地獄をなし、顧みて自ら責むるや八寒地獄の寒心をなし、仰て情焰を燃すや八熱地獄の焦心をなす。

彼嘗て月を手に取り日を握り四天下を魔界となして大魔王と仰かれんと欲したる提婆が、其の通力を釋迦の佛力に角せしむることを敘して、

『先大切の馬將軍汝等が死骸の下積。』と、兩足つかんで二つにさつと引裂、虛空を白眼て息す。山河草木鳴動し、降り來る雨は百千の劍と成てぞ落かゝる。去れども如來は光を放ち晏如として立給へば、劍はちうにて微塵に摧け御身に障る刃もなし。『よし通力には叶はずとも、腕の力で打殺さん。』と、十丈餘りの大石一羽より猶輕〳〵とひつかゝへて左足をふみゑいやうんと投付る。釋尊左りの御足にて蹴返し給へは、此大石海山超て蒼黎山の頂に落留る。此時御足の御指損じ御身より血を出す。八逆罪ぞ恐ろしき。提婆大きに怒りをなし、『ゑゝ通力もまだるし。ねぢ殺して捨んもの。』と。大手を廣げてかゝりしが、俄に震動雷電して大地二つにさつと裂け、阿鼻大焦の猛火の焰燃上り〳〵、提婆が五躰を焦ぜたり。遁れん逃んと叫べども煙りにむせんで眼も暗み、四轉八倒狂ひ死に、眞倒に打かへし、奈落の底にぞ沈みける。

宇宙に於ける二勢力、自己中心力、共同中心力

調和相

變化相

と云ひたりしは、即ちかの罌粟粒よりも小さき一點の意念より起りたる胸中に於ける猛烈なる意思と意思との戰を叙したるものにあらざらんや。

顧ふに宇宙は二樣の力に由て萬有の差別相を顯ずるものにはあらざる乎。曰く、求心力と稱する自己中心力に由て。曰く、遠心力と稱する共同中心力に由て。

柳は自ら綠に、花は自ら紅。山は自ら峙ち、水は自ら流る。雲雀は天に歌ひ、胡蝶は野に舞ひ、無邊の風月は長へに照り、不盡の乾坤は常に懸る。此の如きは豈自己中心力が共同中心力に勝ちて個物の上に其調和相を顯したる瞬間にあらずや。

然れども日は夜を趁ふて去り、秋は春に代りて來り、高岸谷となり、深谷陵となり、咸陽宮は暮烟に鎖され、バビロン城は芳草に封せられ、千年の都府山河在り、古來歌舞の地鳥雀飛ぶ。馬を波斯の高原に驅りたる歷山王の雄圖今安くに在るや。赤縣四百州を震撼したる豐太閤の覇業已に桃山の春老ひたるにあらずや。英雄窮竟馬前の塵のみ。百年の榮華は草頭の露に過ぎず。彼等が生前の砂に畫きたる一代の勳業も星霜の手に搔消されて痕無んと欲するなり。天人猶五衰の日に逢ふと云へり。釋尊且つ栴檀の烟を免れず。此くの如きは豈共同中心力が自己中心力に勝て個物の上に其變化相を顯じたる刹那にあらずや。

絕對調和

斯く二樣の力が間斷なく相鬪戰して小調和の次第に大調和に幷呑せらるゝ所以は、實に極大中心力が萬有を征伏して之を宇宙の大中心たる至眞至善至美の絕對調和に驅り去るものにあらざらんや。

個人想の社會想に吸收せらるゝ亦同一の作用にして、宇宙の躰は無

小宇宙の調和

限にして調和し、宇宙の相は有限にして矛盾すると同時に、一の小宇宙たる人は其靈界に於て自在に其社會想たる道德に調和せんとするに係らず、獨り肉塊の伴はざる、自ら靈肉間の調和を破り以て道德の調和に走らんとするものにあらずや。

美の在る所

此の調和の成る所には猶電氣の離合する所に其電光の放たるゝが如く、一種神秘の光漏れて、造化の胸臆をほの露はすべし。此の神光の心地を射る所、こゝに白光不思議なる感想の波起ち、靈彩奕々たる所謂美の渦紋や顯れん。是れ詩人が掬んで以て人間以上の聲を發するの所。要するに是れ人生極致の存する所にして又畸曲極致の存する所なるべし。

個人想の主動力、情愛と勢譽

而して彼は更に進んで個人想即ち個人性の上に働く最大企圖の主因たるべきものを數へて、愛情と勢譽との二者を其重なるものとなし

人生の禍杆

其動力

たり。且つ其如何にして個人想の主因たるへき乎を解して、人生の禍杆は最大愛情と最大勢譽とに對し、之を未來にしては將に得んとするの希望と將に失はんとするの恐怖とにありとし、之を過去にしては始めて得たるの喜びと始めて失ひたるの消極的激情なる悔恨と積極的激情なる憤怒とにありとしたり。又其最大企圖と道德との一致に對し、之を未來にしては將に得んとするの希望と將に失はんとするの恐怖とにありとし、之を過去にしては始めて得たるの喜びと始めて失ひたるの消極的激情なる悔恨と積極的激情なる憤怒とにありとしたり。

即ち所謂最大企圖のある所は則ち人生の突所にして、人類弱點の在る所なるを以て、人は此の弱點を刺衝することに由て最も甚烈なる作動をなすべく、其作動の甚烈なるは實に人をして盲目ならしむる

ことあるなり。此の瞬間は意思も智力も乃至全躰軀も、悉く情の配下に屬して共に妄動するを甘んずるに至るなり。

去れば「長町女腹切」に於ける律義なる半七は、愛情の成功を希望して委托物典賣をなしたるにあらずや。「淀鯉出世瀧徳」に於ける吾妻は、爲に殺人罪を犯したるにあらずや。「曾根崎心中」に於ける小心なる徳兵衛と同情に富むお初とは、恥を思ふの消極的義憤と愛の破裂に對する恐怖心とによりて情死したるにあらずや。「重井筒」に於けるお房徳兵衛も情死したるにあらずや。「心中二枚繪草紙」に於る市郎右衛門は恥を雪がんと欲し、「生玉心中」に於ける嘉平次も「今宮心中」に於ける次郎兵衛も「卯月の紅葉」に於ける與兵衛も自ら恥ぢて死したるにあらずや。「戀八卦昔暦」に於けるおさん茂兵衛と「堀川波の鼓」に於けるお種と「重帷子」に於ける笹野權三とおさゐとは悔を以て死したるにあらずや。「博多小女郎波枕」に於ける惣七は生存の希望と愛に對する恐怖との爲に遂に海賊の群に入りたるにあらずや。「女殺油地獄」の河内屋與兵衛は借錢を返さんとするの餘遂に人を殺したるにあらずや。「宵庚申」に於ける半兵衛夫妻は名譽に對する恐怖の爲に死したるにあらずや。「丹波與作」の與作は愛の繼續に對する希望の爲に博戲を弄し小兒を敎唆して盜をなさしめたるにあらずや。「歌念佛」の清十郎は讒誣に對する激怒の爲に人を刺したるにあらずや。「冥途飛脚」の忠兵衛は稠人中に辱かしめられて依托金の封を破りたるにあらずや。「心中天網島」に於ける小春と治兵衛とは愛と道德との一致に對する希望の爲に死したるにあらずや。

然らば此くの如く其れ大なる人生企圖の主因となるべき愛を彼は如何に釋解したりし乎。愛は彼が最も力を極めて之を描きたりしもの。

愛を如何に解釋せし乎

戀愛

戀愛の成立

父の愛を畫きては子の爲に其罪に伏せんと欲したるものをも描き、子の愛を畫きては父と其名を同ふする人の爲に盗をなさんと欲したるものをも描き、兄弟の愛を畫きて姉の爲に不義に陷らんと欲したるものをも描き、兄の爲に死若くは不具を祈りたるものをも描き、從者の愛を畫きては献身的の愛を其主に捧げたりし「淀鯉出世瀧徳」に於ける新七夫妻の如きものをも描き、又主人の愛親族の愛知人の愛をも描きたりき。然れども其の最も多く且最も意を用て畫きたりしは男女の兩性間に於ける愛情なりしなり。所謂戀愛なりしなり。」彼が畫きたる戀愛の成立は、或は過誤に始まりしものもあるべく、或は同棲に起りたるものもあるべく、或は端を美貌を見ることによりて發し、或は縁を技能に服することによりて起し、或は久しく相馴るゝことによりて成り、所謂『誠も嘘も素一つ。譬へば命抛ち如何

戀愛其物

に誠を盡しても、男の方より便なく違さかる其時は、心矢竹に思ひても、斯した身なれば盡ならず、自ら思はぬ花の根引にあひ、かけし誓も嘘になり。又初より僞りの勤ばかりに逢ふ人も、絶ず重ぬる色衣つゐのよるべとなる時は、初の嘘も皆誠。兎角唯戀路には僞りもなく誠もなし、縁のあるのか誠ぞや。』なるものもありしなるべし。然れども其眞に相愛するに至りたるは、皆他の愛を惹くに足るへき多少の性情の好所あるを知りたるに由らずんばあらざる如し。且つ彼が畫きたる戀愛其物に至ては、其成立の如何に係らずして極めて高潔にして、稱して聖愛ともなすべきものありたり。忠兵衛が撒散らしたる小判の上に、はら〳〵と井手の山吹の露置き添ふるが如くに濺きたりし梅川の此時の涙の玉に、亦些個の曇りある乎。『あれお夏〳〵』と呼はいの。おふ〳〵其所にか、何處にぞ。いや〳〵い

戀愛の一顯象たる情死

や待て暫し。あれは我家に父の聲、我を尋ねて我を呼ぶ。親も懐迫しや。夫も戀しや。父は子をよぶ夜の鶴、我は夫よぶ野邊の雉子。駈け行ん夜は何時ぞ、鐘は幾つ、八つか、七つか、曉風の辻行燈を吹消して、道も心も真くら〳〵。くる〳〵〳〵、狂ひ亂れ泣亂れ』て去りたる阿夏が此時の戀に、亦些個の汚れある乎。

而して所謂情死なるものに至ては、固より好事として奬勵すべしとせしにはあらざるべく、又事實に於ては或は『世間に多い心中も銀と不孝に名を流し、戀で死ぬるは一人もない』やも知るべからざりしと雖、情死に於ける彼等が愛は決して卑むべきものとはせざりしに似たり。彼は一たひ之を其筆に上すや之を其聖火に淨め、以て現世を超脱し現存在を超脱して靈界の共棲を希圖するてふ極めて崇高なるものとなしたり。

戀愛の一顯象たる嫉妬

最高戀愛即ち獻身的戀愛

彼は又『りんきするのは女の役』と稱して嫉妬を悉く非視せざりしのみならず、之を占有的戀愛の一顯象として、寧ろ大なる戀愛に必然なる結果となしたる如き形迹なきにあらざりき。然れとも彼は嫉妬の絶望的發作をなし、一轉して一種の憎怨となりたるものをは之を最も恐怖すへき怪象となしたり。固より嫉妬を戀愛の極致なりとはなさゞりしならん。

蓋し彼は嫉妬よりも更に大なる戀愛を畫きたりしなり。嫉妬よりも更に大なる戀愛として沒嫉妬の獻身的戀愛を畫きたりしなり。彼は實に紙屋内よりの一書片の爲に身にも命にもかへぬ大事の殿を思ひ切らんとしたる小春を畫きたるに止まらずして、『私や小供は何着いでも男は世間が大事、請出して小春も助け、太兵衛とやらに一分立て見せて下さんせ。』と道破し、『手附渡して取とめ、請出して其後、

圍ふておくか内へ入るにしてから、其方は何と成とそ。』と問はれて、はつと行當り、『あつあ左樣じや。はて何とせふ、子供の乳母か飯焚か隱居なり共しませふ。』とわつと叫ひて伏沈みたるおさんをも畫きたりき。又其愛するものゝ愛するものを其愛するものに愛せしめんが爲に、遠く出稼の途に上りたる難波屋與平をも畫きたりき。

然らば彼は人生最大企圖の他の主因たるべき勢譽をば、如何に之を解釋したりし乎。彼の勢利を描き榮譽を描くこと固より其愛情を描ける如く多からさりしと雖、亦大に力を用ひざるにあらざりき。而も其勢利の徒を畫くや多くは副人物として之を描きたりしも、榮譽に至ては日本人の特質として之を見ること頗る重く、就中其最高義なる言行合道德に對しての快感の如きは、彼が之を畫くに最も其注意を拂ひたりし所。躰面を重んじ、然諾を苟もせず、廉耻を尙び、

節義を勵まし、勇俠を主とするの類、皆時としては死よりも重く畫かれたりき。

恰も愛は人生企圖の裡面質主因にして、榮譽は表面質主因なりと信せられたるものゝ如く、二者の離合紛糾は實に彼が戲曲的人物の命運を制したりき。かの八百屋半兵衛の死の如き、愛の爲めなるよりは寧ろ躰面の爲なりしを見るべし。

之を要するに彼は戲曲の天地を同情の世界なりと解したりしなり。而して其同情は啻に少數の同情のみにあらず、萬衆の同情ならさるへからざるを解し、萬衆の同情は人生の板挾みより同情を惹くべきは莫く、人生の板挾みは肉躰の板挾みよりは心靈の板挾みより同情を惹くべきは莫きとを解し、且つ其所謂板挾みは外來の出來事の爲に生したる板挾みよりは、自家性情の結果として生じたる板挾みの

彼は論理的に斯く解したるに非ず唯人生の在るが如くに寫したるのみ」彼が戯曲中の人物には矛盾あり

更に大なる同情を惹くことを解したりしなり。即ち愛きは義理を專らとするものを其極致の愛きとなしたりしなり。斯くて其義理を專とする愛きを生するには、社會想と共に人を板挟みにすべき個人想のあることを要すとし、更に個人想の成さるべき重なる因由を愛と勢譽とにありとしたりしなり。

然ども彼は固より論理的に斯く解したりしにはあらざりき。彼は唯人生の在るが如くに寫したるのみ。人生の在るが如くに寫したるもの實に斯くは解釋せらるゝのみ。

是の故に彼が戯曲中の人物は人類の實際が在る如くに頗る矛盾あり き。善人必ずしも終始善ならず。惡人必ずしも惡を以て貫かず。罪を犯す悉く惡人にあらず。善をなす悉く善人にあらず。善人にも亦不好所あるなり。惡人にも亦好所あるなり。海賊小町屋惣七さへ其初

彼が戯曲中の人物には必ず多少の同情を表すべき所あり

は、正直なる一町人なりしにあらずや。人生の行路が一直線にあらざる如く、彼が戯曲中の人の行路も紆舒透迤せり。豈其眞の影なるが爲にあらざらんや。去れども讀み去て何人も其矛盾を覺えざるものは、亦同時美の影なるが爲めなるべし。

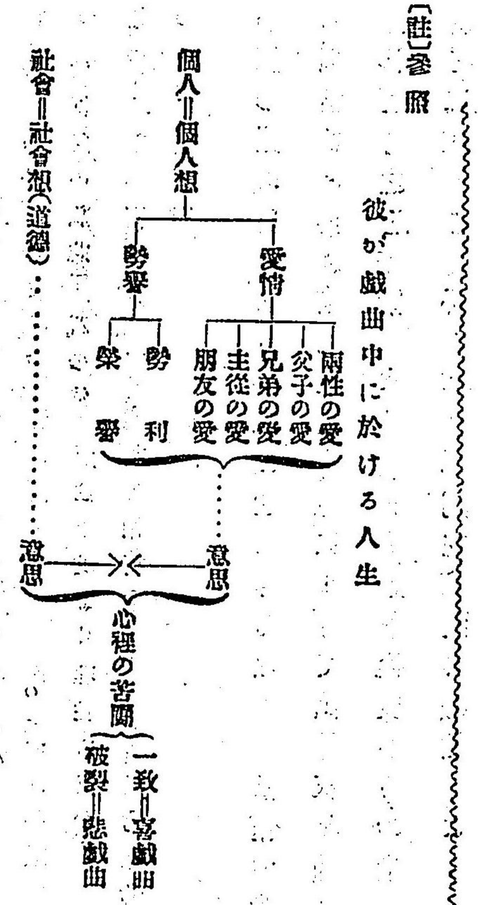
是の故に彼が戯曲中の人物は亦人類の實際が在る如くに幾んと其總てが或點に於て必ず同情を表すべきの人たりき。極惡河内屋與兵衛の如きも、猶可憐なる所あるにあらずや。浮萍も猶花あり、人として誰か多少の好所あらざらん、必ずや他の何人にか同情を表せらるべき所のもの存す。彼が戯曲中の人が皆多少の同情を惹くに足るものなること、豈其眞の影なるが爲にあらざらんや。去れとも讀み去て何人も其惜むべきものを惜まざるなきは、亦同時に美の影なるが爲めなるべし。

彼が戯曲中の人物は悉く大同にして悉く小異なり

是れ彼が戯曲中の人物が活きたる人物なりし所以

是の故に彼が戯曲中の人物は亦人類の實際が在る如くに悉く大同にして悉く小異なりき。梅川の如きお房の如き幾んと相同しくして竟に相同じからざるにあらずや。其同じきとは人類の相同じきが如く同じく、其同しからざることは其面の同じからざるが如くに同しからず。彼が戯曲中の人が其幾んと同じくして竟に同じからざるものは、豈其眞の影なるが爲にあらざらんや。去れども讀み去て人に其同しきと否とを問ふに暇あらざらしむるものは、亦同時に美の影なるが爲なるべし。

此くの如きは實に彼が戯曲中の人物をして活きたる人物たらしめし所以なりき。然らば彼が戯曲の演せらるゝに當りて復た優人なく、彼が戯曲の讀まるゝに當りて復た作者なきもの、蓋し彼が畫ける人物は人物其ものの性情のみありて、作者の性情意見と毫も相渉らざ

彼が戯曲中の人生

るに由る歟。